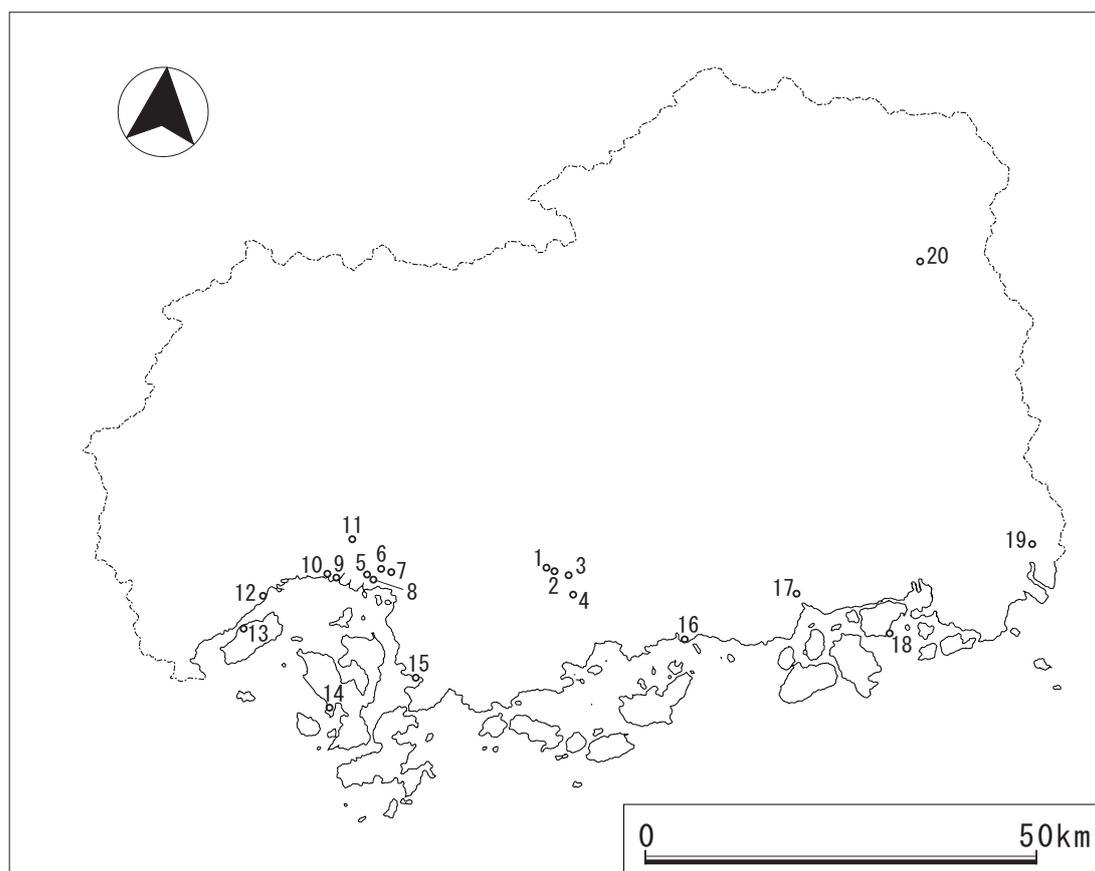


開発に伴う協議と立会・試掘調査の概要（2007年度）

1. はじめに

広島大学が所管する施設所在地は、本部キャンパスが位置する東広島市および統合移転する以前に本部キャンパスなどが所在した広島市を中心に広島県各地に分散しており、合計28ヶ所を数える（大学・附属学校校舎等を中心とする敷地7ヶ所、研究所等施設敷地8ヶ所、課外活動施設敷地5ヶ所、職員宿舎敷地8ヶ所）。これら大学関係施設では2007年度も多くの改修、新営工事が実施されているが、掘削を伴う工事については、本年度も東広島市東広島地区、広島市霞地区が主体であった。



第49図 広島大学の校地所在地図（職員宿舎を除く）

1. 東広島地区 2. サイエンスパーク地区 3. 総合グランド地区 4. 下三永地区 5. 東千田地区 6. 霞地区 7. 東雲地区 8. 翠地区 9. 観音地区 10. 庚午南地区 11. 三滝地区 12. 廿日市地区 13. 宮島地区 14. 沖美地区 15. 呉地区 16. 竹原地区 17. 三原地区 18. 向島地区 19. 春日地区 20. 帝釈地区.

全体で協議件数は47件あり、そのうち18件について立会調査を行った。本年度は、試掘調査、発掘調査に至る事例はなかった。協議件数47件を地域別に見ると、東広島地区23件、霞地区14件、翠地区3件、東雲地区2件、宮島地区1件、沖美地区1件、春日地区3件である。

2. 試掘・立会調査の概要

次に、地区ごとに、試掘調査、立会調査の概要について述べてみたい。

東広島地区（東広島市）

1) 鴻の巣遺跡保存区内通路補修工事

所在地 東広島市鏡山1丁目

調査期間 2007年12月25日

調査面積 約215㎡

調査概要 雨水などによって溝状の窪み等が形成され、路面の凹凸がかなり激しいことから路面の修復作業を行った。元の地表の上に10～2cm程度の盛土を行って歩道としており、全体に10cm程度の漉き取りを行った後、新たな土を入れて平坦に均し、全体に填圧をかけて作業を終了した。漉き取りに関しては旧地表面まで達した箇所はなかった。

2) 山中池南遺跡第2地点保存区整備工事

所在地 東広島市鏡山2丁目

調査期間 2月18日

調査面積 約300㎡

調査概要 山中池南遺跡第2地点の保存整備に関連して一部掘削工事を伴うため、立会調査を実施した。資材搬入用通路のため歩道と保存区の間にある堰堤状の高まり部分の掘削が必要となったが、掘削範囲内に発掘調査を行わなかった部分がわずかに残されており、植栽と表土層を除去した後、人力によって少しずつ堆積土を掘り下げた。掘削範囲は幅（南北）約3.7m、長さ（東西）約4.7mで、慎重に掘削を行ったが、遺物・遺構とも発見されなかった。資材搬入用通路は歩道側が低く、保存区に向かって上方に緩やかに傾斜をもち、最大で深さ1m程度の掘削を行ったが、調査の結果、大半は調査区内に堆積した雨水による再堆積土で、未調査部分は最大で東西約1.2m、深さ（高さ）40cm程度の断面三角形状に残されているのみであった。未発掘部分の堆積層は大きく2枚認識され、上層は表土層、下層は黄褐色粘質土で、発掘調査時の

第6表 2007年度（平成19）広島大学における開発に伴う埋蔵文化財協議一覧

	件名	対象面積 (㎡)	協議時期	対応
東広島地区（東広島市）				
1	中央広場植栽工事	120.0	2007年5月	工事
2	陸上競技場改修工事	1200.0	2007年5月	工事
3	生物生産学部自転車置場新設工事	73.5	2007年7月	工事
4	法学部・経済学部講義棟スロープ等取設工事	53.5	2007年8月	工事
5	文学部中庭側溝等取設工事	4.0	2007年9月	工事
6	農場メタン水槽汚水管取設工事	4.6	2007年9月	工事
7	保育所新営工事	950.0	2007年9月	工事
8	池ノ上学生宿舎連絡通路設置工事	28.0	2007年11月	工事
9	生物圏科学研究科精密圃場給水管改修工事	257.0	2007年12月	工事
10	北グラウンド等照明設備増設工事	265.0	2007年12月	工事
11	池ノ上学生宿舎自転車置場整備工事	12.6	2007年12月	工事
12	鴻の巣遺跡保存区内通路補修工事	215.0	2007年12月	立会
13	池ノ上学生宿舎および連絡通路外灯設置工事	532.8	2007年12月	立会
14	教育学部音楽棟外灯取設工事	17.0	2007年12月	工事
15	理学研究科植物園管理棟庇取設工事	0.6	2007年12月	工事
16	理学研究科研究棟A南側駐輪場屋根取設工事	30.0	2007年12月	工事
17	西条共同研修センター配水管等改修工事	120.0	2008年1月	工事
18	山中池南遺跡第2地点保存区整備工事	300.0	2008年1月	立会
19	西第1福利会館自動扉等取設工事	30.0	2008年1月	工事
20	東体育館南側プレハブ撤去工事	190.3	2008年2月	工事
21	ぶどう池周辺散策道解説板設置工事	15.4	2008年2月	立会
22	ぶどう池東側バードウォール取設工事	1.2	2008年2月	立会
23	総合博物館サテライト看板取設工事	1.0	2008年3月	工事
霞地区（広島市）				
1	旧西病棟取り壊し	1350.0	2007年4月	工事
2	原爆放射線医科学研究所研究棟新営工事	3700.0	2007年4月	立会
3	薬学系研究棟植栽移設工事	90.0	2007年7月	立会
4	薬学系研究棟既設デッキ撤去および雨水枘設置工事	22.4	2007年7月	工事
5	歯学系研究棟B地下ピット設置工事	137.0	2007年9月	工事
6	薬学系研究棟玄関スロープ新設工事	50.0	2007年9月	立会
7	薬学系研究棟周辺配管工事	1645.0	2007年9月	立会
8	薬学系研究棟実験室ピット新設工事	56.0	2007年9月	立会
9	看護師宿舎改修工事	19.2	2007年10月	工事
10	歯学系研究棟B配管工事	325.0	2007年11月	立会
11	大学病院環境整備工事（植栽移設ほか）	2505.0	2007年12月	立会
12	大学病院電気配管改修工事	2.3	2007年12月	工事
13	大学病院外灯設置工事	320.0	2007年12月	立会
翠地区（広島市）				
1	中高校舎足洗場改修工事	7.5	2007年7月	工事
2	附属中高校渡り廊下設置工事	154.0	2007年9月	工事
3	附属中高校2号館耐震補強工事	94.0	2007年9月	立会
東雲地区（広島市）				
1	砂場改修工事	63.2	2007年5月	工事
2	手洗い場取設工事	6.8	2007年8月	工事
宮島地区（廿日市市）				
1	自然植物実験所門扉改修工事	5.4	2007年9月	立会

沖美地区（江田島市）				
1	附属小学校臨海教育場囲障取設工事	4.5	2007年6月	立会
春日地区（福山市）				
1	体育館玄関スロープ新設工事	37.4	2007年7月	工事
2	中高校舎B棟スロープ取設工事	27.0	2007年11月	工事
3	中高校舎C棟スロープ取設工事	29.4	2007年11月	工事

第Ⅲ層に対比されるものと思われた（下底部付近は一部第Ⅳ層に対比されるかもしれない）。また、本年度の保存区整備は西半部に遊歩道を設置する計画で、基本的には盛土を行って遊歩道を設置するが、斜面部の一部については15cm程度の掘削を伴ったため、これについても立会調査を行ったが、遺構・遺物とも発見されなかった。

3) ぶどう池東側バードウォール取設工事

所在地 東広島市鏡山1丁目（ぶどう池東縁部）

調査期間 3月11日

調査面積 約1.2㎡

調査概要 野鳥観察のためのバードウォールをぶどう池湖岸に設置に伴って立会調査を実施した。バードウォールは6本の支柱によって支える構造で、支柱基礎を据えるために平面40cm四角、深さ約30cmの掘り方を掘削したが、遺構、遺物とも検出されなかった。

4) ぶどう池周辺ほか散策道解説板設置工事

所在地 東広島市鏡山1丁目（ぶどう池東縁—生体実験園）

調査期間 3月27日

調査面積 約15.4㎡

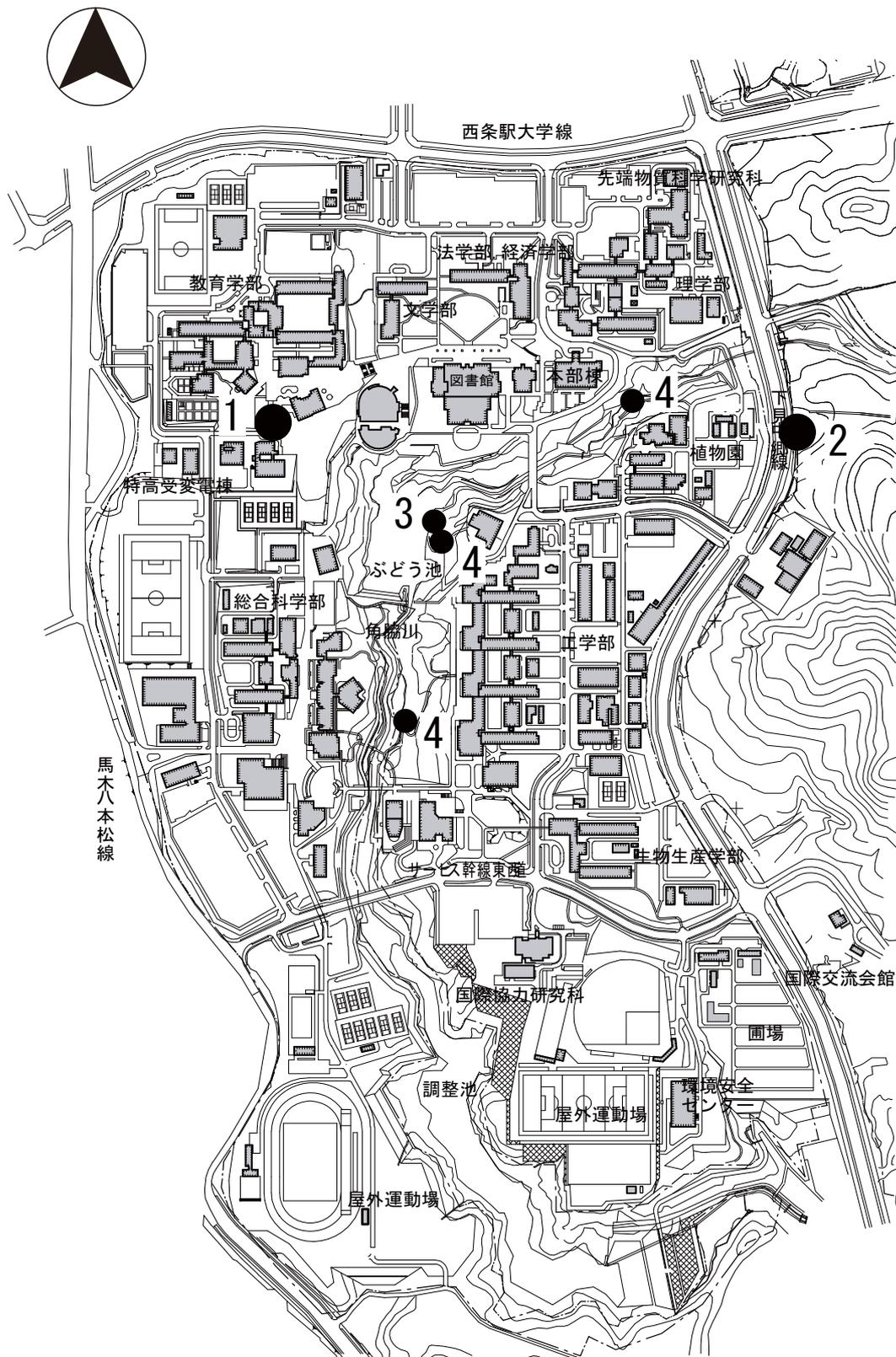
調査概要 生態実験園散策道沿い3ヶ所、工学部ビオトープ1ヶ所に解説用看板を、総合博物館近くの1ヶ所に生態実験園・工学部ビオトープ案内板を設置するため立会調査を実施した。看板設置5ヶ所のうち実際に立会調査を実施したのは旧地形が残されている可能性のある生態実験園散策道沿い2ヶ所、工学部ビオトープ1ヶ所である。看板支柱を直接埋設・固定するため、直径約25cm、深さ80cmの掘り方を各地点2ヶ所ずつ掘削した。いずれの場所においても遺構、遺物とも検出されなかった。

5) 池ノ上学生宿舎および連絡通路外灯設置工事

所在地 東広島市鏡山2丁目

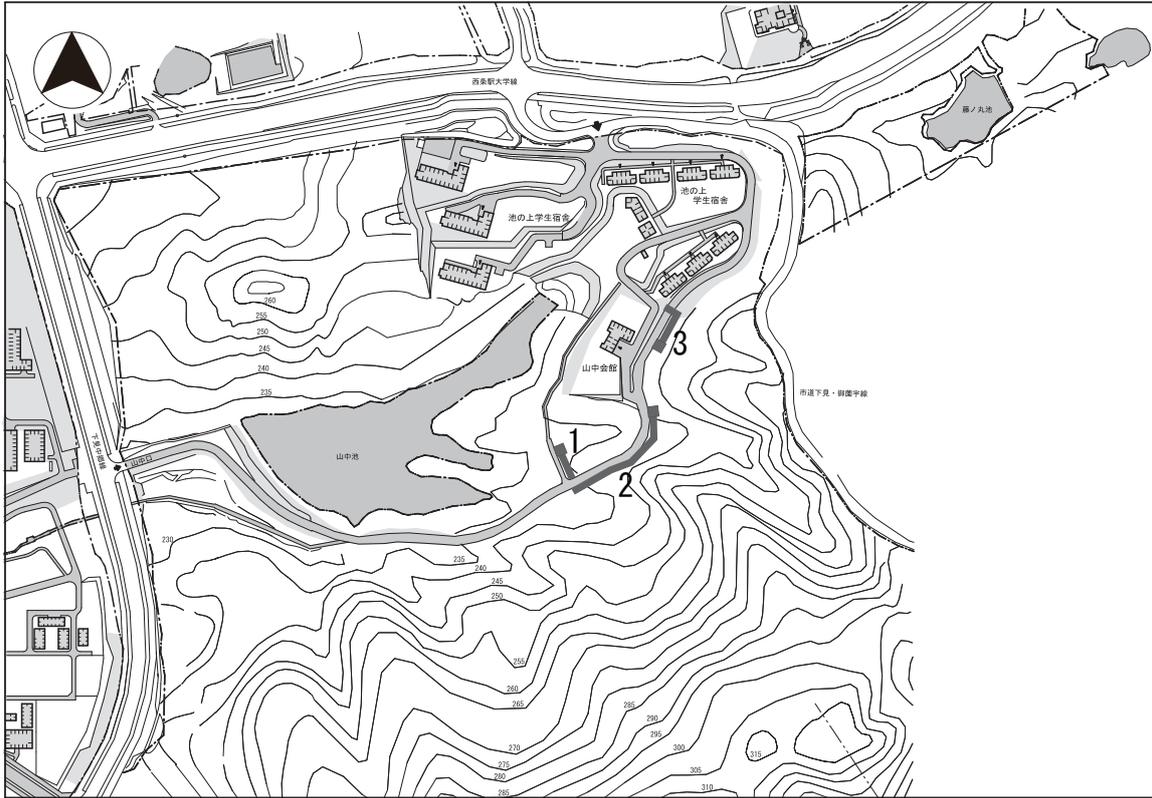
調査期間 2008年3月28日～4月4日

調査面積 約532.8㎡



第 50 図 2007 年度東広島地区の立会調査位置図 (1)

1. 鴻の巣遺跡保存区内通路補修工事 2. 山中池南遺跡第 2 地点保存区整備工事 3. ぶどう池東側バードウォール取設工事 4. 散策道解説板設置工事



第 51 図 2007 年度東広島地区の立会調査位置図 (2)

(1～3は池ノ上学生宿舎および連絡通路外灯設置工事に伴う調査区を示す)

調査概要 アカデミック地区と池の上学生宿舎を結ぶ連絡道沿いに外灯を増設する工事に伴って立会調査を実施した。掘削は山中池の南側を東西に貫く連絡道路の南辺に沿って外灯を増設するため、外灯基礎および電気配線配管設置に伴って行ったが、西側の大部分については既設の外灯を設置する際に電気配管が敷設されており、それらを再掘削して利用すること、新設の外灯基礎部分は基本的に連絡道路造成の際の盛土であることなどから、旧地形の掘削の可能性のある藤棚への分岐路付近から東側の部分について調査を行った(第51図)。調査箇所は3ヶ所で、藤棚へのアクセス道路南部付近(1区、第51図1)、藤棚への分岐路から学生宿舎入口までの通路沿い(2区、第51図2)、学生宿舎西端部の山中会館付近(3区、第51図3)である。

1区は学生宿舎連絡道から山中池東端部の藤棚へ至る分岐路であり、北側に延びる丘陵先端裾の緩やかな傾斜地で、山中池に向かって北西に延びる小丘陵状の地形を呈していた。1994年度の試掘調査で発見された山中池南遺跡第4地点の約100m東に位置し、同様な立地であることから遺跡が存在する可能性が考えられた。分岐点から通路の東側沿いに電気配管掘り方と外灯基礎を掘削した。電気配管掘り方は、幅約

45cm、長さ 20 m で、深さ 35 ～ 40cm の規模で掘削した。堆積層の大半は道路敷設に伴う造成土と判断された。電気配管の末端に外灯基礎掘り方を掘削した。掘削規模は、東西約 2 m、南北約 1.2 m、深さ 1.45 m で、7 枚の堆積層が認められたが、上部の 6 枚は造成に伴う堆積層と判断された。最下層は暗灰緑色粘質土で低地に堆積する土層の可能性が有る。現状は山中池岸まで約 40 m の距離があり、通路部付近は平坦な地形であるが、本来は比較的急な丘陵斜面で、調査区付近まで谷が切れ込んでいたものと推定される。調査では、遺構・遺物とも検出されなかった。



写真 1 1 区外灯基礎部分堆積状況

2 区は藤棚アクセス道分岐部から学生宿舎入口付近までの連絡道沿いの部分（道路南側）で、西部～中央部（西端部～既設外灯）は南東から北西に延びる丘陵の先端部付近、東部（既設外灯以東）は東側丘陵部との間の谷地形である。調査区の大半は電気配管掘り方のための掘削で、調査区西端部と既設外灯の間の中地点と調査区東端部に新設外灯基礎掘り方を掘削した。電気配管掘り方は、幅約 40cm、深さ 40 ～ 45cm の規模である。調査区中央部では、道路南側に道路敷設の際に削平した丘陵部の断面が法面として露出しており、法面の高さは最大で 50 ～ 60cm 程度であった。開発予定地内に旧地形がある程度残されており、表土下に灰褐色砂質土、黄褐色系粘質土の堆積を確認した。調査区西部では、一部にバラスを含む層もあり、層相から道路敷設に伴う盛土と判断された。調査区東部は道路敷設に伴う盛土と判断された。調査区中央部の外灯基礎掘り方は、東西約 2.6 m、南北約 1 m で、深さ 1.45 ～ 1.5 m の規模である。堆積層は 5 枚に区分され、上半部（1 ～ 3 層）は道路造成土、下半部（4・5 層）は自然堆積層と判断された。下半部の堆積層は灰白色系粘質土と褐色系砂質土の互層で、谷部に堆積する土層に類似している。調査区東端部の外灯基礎は東西約 1.2 m、南北約 1.3 m、深さ約 1.4 m の規模である。調査区東部の配管掘り方堆積層ともすべて黄褐色砂質土（マサ土）であり、道路の造成土と判断される。調査区中央部は平坦な旧地形が残されていることから、何

らかの遺構、遺物の存在が期待されたが、何も検出されなかった。

3区は山中会館南側の痩せ尾根に挟まれた谷部と学生宿舎南端部の連絡道である。谷部は連絡道造成の際に埋められ、平坦地となっていた。電気配管掘り方は連絡道南辺沿いに配置するとともに東端部で北側に屈曲して連絡道を横断し、連絡道路下の電源に接続するもので、新設外灯は電気配管の西端部に位置する。掘



写真2 2区中央部電気配管掘り方と道路法面外灯基礎部分堆積状況

削予定の連絡道路は基本的に盛土によって造成していることから、連絡道路南側の掘削部分について調査した。電気配管掘り方は、幅約40cm、深さ45cmの規模で、すべて道路造成に伴う盛土と判断された。外灯基礎掘り方は、南北約1.4m、東西約1.8m、深さ1.5mの規模で、5枚の堆積層を確認した。上半部(1～3層)は道路造成の際の盛土、下半部(4・5層)は褐色系砂質土で谷部の自然堆積土と思われる。遺構、遺物とも検出されなかった。

霞地区(広島市)

1) 原爆放射線医科学研究所研究棟新営工事

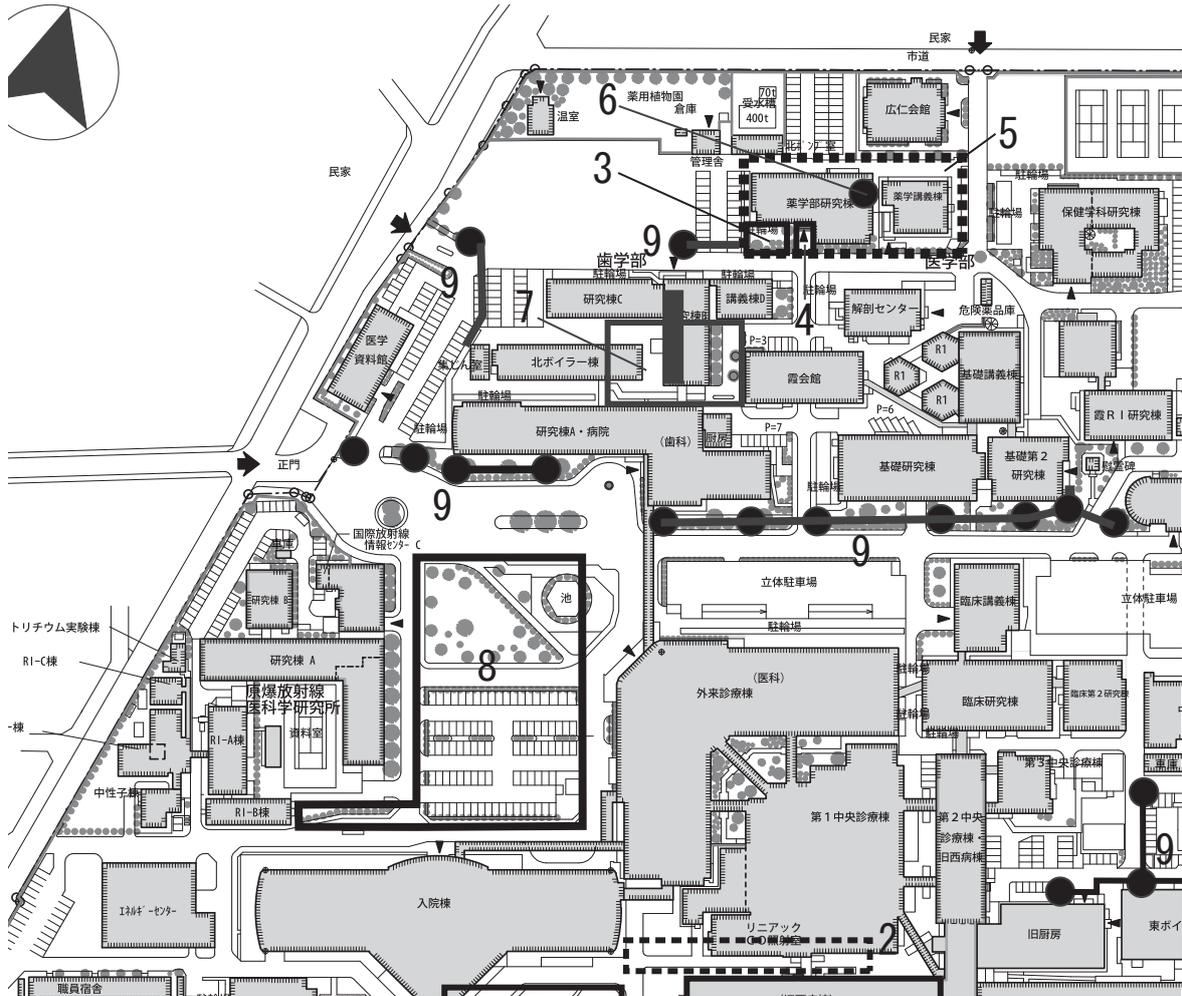
所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

調査期間 6月20日・26日(大学病院西病棟解体工事)、2月13日～2月20日、2月29日、3月4日

調査面積 3700㎡

調査概要 原爆放射線医科学研究所(以下、原医研と略す)建物建設に先立つ大学病院西病棟建物解体工事(第52図1)および原医研建設に伴う電気配管敷設工事、排水管敷設工事、ガス配管敷設工事、植栽移設工事(第52図2)に伴って立会調査を実施した。

原医研建設予定地には旧西病棟建物が建っており、基礎撤去の際に立会調査を実施した。西病棟は1961年(昭和36)及び1966年(昭和41)に建設された4階建物で、建物基礎掘り方は約2mの深さまで掘削が及んでおり、掘削は旧陸軍広島兵器支廠(以



第 52 図 2007 年度震地区の立会調査位置図 (1 : 4000)

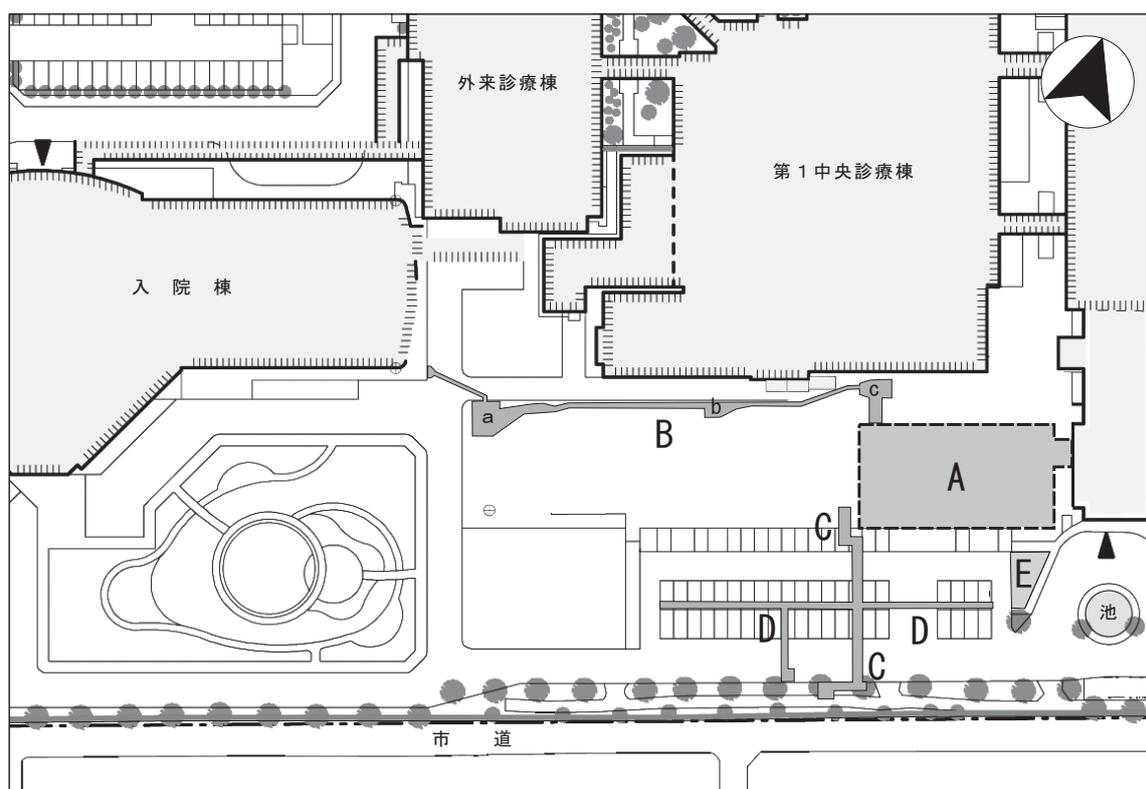
(1～9は立会調査地区を示し、工事名は以下の通りである。1. 旧西病棟解体工事、2. 原爆放射線医科学研究所新営工事、3. 薬学系研究棟植栽移設工事、4. 薬学系研究棟玄関スロープ新設工事、5. 薬学系研究棟周辺配管工事、6. 薬学系研究棟実験室ピット新設工事、7. 歯学系研究棟B配管工事、8. 大学病院環境整備工事(植栽移設ほか)、9. 大学病院外灯設置工事)

下、兵器支廠と略す) 建設以前の水田最上部に達していた。旧西病棟建物基礎は長さ 5 m 程度の松杭を垂直に打ち込んで支えていたが、原医研のコンクリート基礎杭を打ち込む位置に存在する松杭については撤去することとなり、兵器支廠以前の遺構・遺物が検出される可能性があることから、松杭撤去作業についても立会調査を実施した。調査では遺構、遺物とも検出されなかった。

原医研建設に伴う新規の電気配管敷設工事に際して立会調査を実施した(第 53 図 B)。電源は震地区南西部に位置する入院棟南東端で、配管は入院棟南東端から入院棟の東に位置する外来診療棟の南縁沿い原医研敷地北西端までほぼ直線的に東西に敷

設するルートである。途中、3ヶ所にハンドホール（管理用枿）を設置した（第53図 a～c）ハンドホール掘り方及びその周辺部配管掘り方は深さ1.8～2.0 m、西端部ハンドホール（a）の西側配管掘り方は深さ70cm～1.5 m、西端部と中央部のハンドホール掘り方（a・b）の間の配管掘り方は深さ80cm程度、中央部と東端部のハンドホール掘り方（b・c）の間の配管掘り方は深さ1.3～1.4 m程度まで掘削した。

調査区西部ハンドホール付近から西側は地表下1 m付近まで旧 RI センターや旧大学病院西病棟建築に伴って広範に削平を受けており、調査区の大半では地表下1.5 m前後まで掘削され、攪乱された埋積土が堆積していた。しかし、調査区西端部ハンドホール掘り方北部（第54図 C）、中央部ハンドホール東端部およびその東側配管掘り方（第54図 D）では地表下1 m前後～1.5 m前後に硬く締まった黄褐色～黄色砂質土・粘質土の堆積が認められた。西端部のハンドホール掘り方北部では、地表下1.2 m付近までは旧 RI センター施設建築に伴って削平されていたが、それ以下は堆積層が残存しており、地表下1.6 m付近まで黄褐色～黄色層を中心とする堆積層が認められ



第53図 原爆放射線医科学研究所立会調査平面図（1：1500）

（濃灰色部分は調査区を示し、Aは原爆放射線医科学研究所建物基礎工事地区、Bは電気配管敷設工事地区、Cはガス配管敷設工事地区、Dは雨水排水管・排水路敷設工事地区、Eは植栽移設工事地区である。）

た。堆積層は数枚に区分でき、暗灰色粘質土上に、厚さ20～30cm、幅1～数mの規模でブロック状に、黄色粘質土、暗褐色砂質土、黄褐色粘質土、暗緑色砂質土等を積み重ねて堆積させている様子が観察された（写真3、破線の下層）。各層は非常に良く締まっていた。中央部ハンドホール東端部から東側配管掘り方にかけても地表下1.2mまで掘削されていたが、それ以下の堆積層は残存しており、黄褐色砂質土（マサ土）、黄色粘質土などの堆積がほぼ全域で確認された。黄褐色砂質土は硬く締まっている部分と締まりの弱い部分があり、長さ20～30cm大の角礫層を伴う部分も観察された。これらの黄褐色～黄色土を中心とする堆積土（角礫層を含む）は兵器支廠造成の際に土地を嵩上げした造成土と推定される。

また、ハンドホール掘り方部を中心に黄褐色～黄色土の下層で暗灰色～暗青灰色粘質土（シルト層）や灰色砂質土など確認した。暗灰色～暗青灰色土は地表下約1.6m前後で確認され、兵器支廠造成以前の水田堆積層などと推定される。中央部ハンドホール掘り方では、暗灰青色粘質土上面で木杭列を検出した（第54図B）。直径5～7cm程度の角杭で、1m前後の間隔で南北方向に直線的に配置



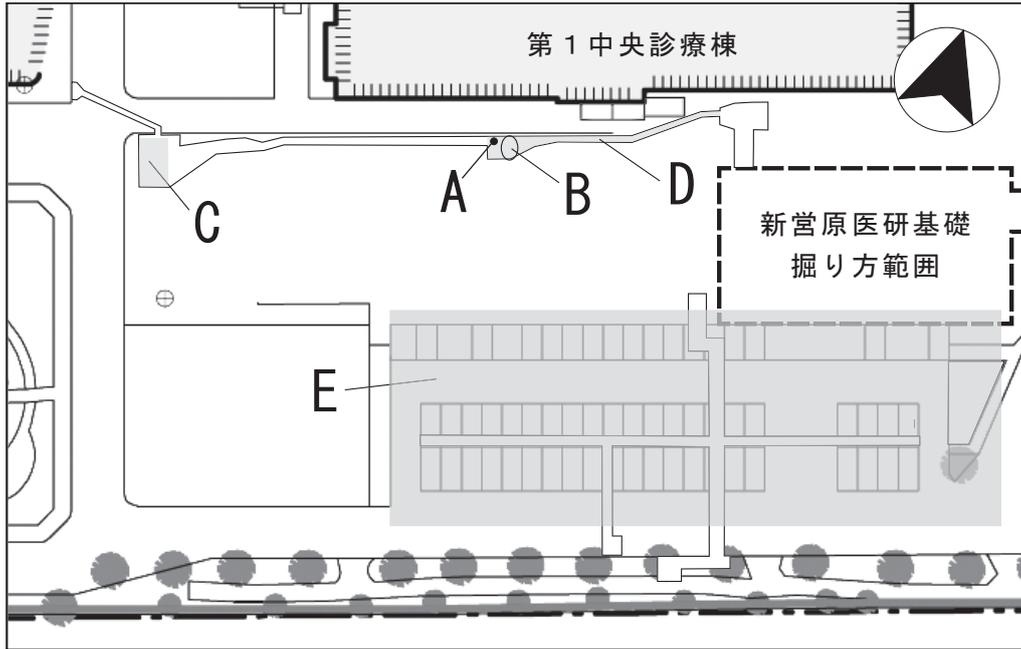
写真3 電気配管敷設工事西端部ハンドホール掘り方部分堆積状況



写真4 排水管敷設工事地区コンクリート面検出状況



写真5 排水管敷設工事地区検出コンクリート面南端部の状況



第54図 原爆放射線医科学研究所立会調査検出遺構平面図（1：1000）

（Aは磁器出土位置、Bは杭検出範囲、C・Dは黄色～黄褐色粘質・砂質土検出範囲、Eはコンクリート面の現状における広がり の推定範囲を示す。）

されていた（範囲が狭いため、検出したのは3本程度）。また、木杭の西側で近世～近代と思われる磁器片1点（産地不明）が出土した（第54図A）。兵器支廠造成前の遺構、あるいは兵器支廠造成に伴う遺構と推定される。

なお、調査区西部のハンドホール周辺における堆積層の概要は次の通りである。

- 第1層 整地土（マサ土） 15cm
- 第2層 暗褐色砂質土 80cm コンクリートブロック、礫混じり
- 第3層 灰褐色砂質土 20cm 礫を混えるが、量的には少ない
- 第4層 黄褐色砂質土 40cm 粘質土との互層、複数枚に分層可
- 第5層 青緑色粘土 10cm
- 第6層 暗灰青色粘質土層（シルト層） 40cm 以上

雨水排水配管・排水路敷設工事地区およびガス配管敷設工事地区は、新設の原医研研究棟の南西部にあたる。ガス配管は原医研研究棟西端部から南へ直線的に延びており、幅1.7m、深さ1.0～1.3mまで掘削した。排水配管は原医研研究棟の南側約20mの位置に雨水用溝を東西に設置し、南側に向けて排水配管を設置するもので、幅約1m、深さ50～60cmまで掘削した。排水配管およびガス配管調査区全域でアスファルト面（アスファルト基礎層を含む）直下（地表下25～30cm）でコンクリート

面を確認した（写真4、写真8）。また、後述の植栽移設部調査区でもコンクリート面を確認しており、コンクリート面は東西60m以上の範囲に広がっていると推定される（第54図E）。南北の広がりについては、南側の端を敷地南端部の東西道路南端の縁石から北側約1mで確認した。端部は途中に幅約30cmの平坦面を形成しながら垂直に落ちている（写真5）。コンクリート上面と端部下面は約50cmの高さがあるが、端部下面については掘削が地表下約60cmまでであったため最下面かどうかは確認していない。北側については旧西病棟根切（基礎掘り方）南端部まで広がっていたことを確認しており、少なくとも南北30m以上の範囲に広がっていたと思われる。

コンクリート面は基本的に平坦でほぼ水平であるが、ガス管敷設工事部の調査区北部で鉄製レールを検出しており、レールを境に北側へ緩やかに傾斜している（写真6）。レールは幅約3cm、深さ2～3cm（錆つきがひどく、正確な形状把握が困難であるが、もっとも深い部分が本来の底面と判断される）の断面方形の溝状で、6本検出した（写真7）。6本のレールの南北両端の距離は約45cmである。2本一組で、レールの間隔は約6cm、各組の間隔は約10cmである。6本のうち南側2本は調査区西端から東へ約1mで途切れている。北側の4本の東端部ははっきり確



写真6 ガス管敷設工事地区コンクリート面および鉄製レール検出状況



写真7 ガス管敷設工事地区検出鉄製レール

認できなかったが、調査区西端から約 1.5 m 程度で途切れている。西側は調査区外に延びており、東西の規模は不明である。鉄製の扉のレールと思われる。傾斜部分は鉄製レールの南北約 3.6m 分を確認できるが、その北側は旧西病棟の根切（基礎掘り方）によって失われている。原医研研究棟根切の際にもコンクリート面が確認されたようであるが、掘削の際に立会を行っていないのでその範囲については不明である。コンクリート面は広範囲にわたってほぼ平坦（5cm 前後の高低差はあり、多少の傾斜はつけられているようである）であること、傾斜面は鉄製レールの北側に位置し、鉄製レールが門を示すものと考えれば、今回検出したコンクリート面の北側全体が緩やかに傾斜していたと想定するより、鉄製レールの北側は通路の一部を示すものとする方が蓋然性が高い。したがって、原医研研究棟南縁付近がコンクリート面の北端と見ることができ、南北約 30 m の規模と推定される。コンクリート面はさらに東西へ広がりを見せるようであるが、その規模については今後の調査で明らかにする必要がある。

このコンクリート面はほぼ均質で厚さ約 20cm 前後であり、鉄筋を入れている。コンクリート層下部から下層にかけて長さ 2 ～ 5cm 程度のやや大型の円礫混層が 5 ～ 10cm の厚さで認められる。さらにその下には角礫層があり（写真 8）、鉄製レール北側の傾斜面についても同様である。角礫は長さ 20 ～ 50cm 程度の比較的大型礫を主体としており、断面で観察する限りでは、無秩序に敷き並べたように見え、平らな面をおおむね上に行っている（写真 9）。角礫層の厚さは約 10cm で、角礫相互の上下の重



写真 8 排水管敷設工事地区検出コンクリート面断面の状況



写真 9 排水管敷設工事地区検出コンクリート面基礎栗石露出状況

なりはほとんどない。角礫層の下は良く締まった黄褐色～黄色系の砂質土(場所によっては粘質土を主体とする)が続いている。複数枚に分層可能で、幅数m程度のブロック状の単位が認められる箇所もある。前述した電気配管敷設工事部分で検出した兵器支廠造成土と推定される堆積層と同様の層相と堆積状態であり、コンクリート面の基礎層および兵器支廠造成土の一部と思われる。

また、鉄製レールの検出された付近の下層では1 m以上の厚さのコンクリート基礎が認められた。バックホウによる撤去が不可能であったため基礎の厚さ(深さ)については明確にできなかったが、上面部分で南北70cm、東西は調査区内で1.5 m分を検出した。おおむね鉄製レールと同じ位置にあるが、基礎北端は鉄製レール北端から南へ約20cmあたりにあり、北側は鉄製レールの位置とは少しずれている。鉄製レールと同様に西側に延びていると考えられる。

植栽移設地区は原医研研究棟玄関前に位置しており、植栽穴を3ヶ所に掘削した。穴の規模は径40～50cm、深さ30～35cmで、排水配管・ガス配管敷設部分の調査区と同様にアスファルト下にコンクリート面が確認された。コンクリート面以下も同様の状況であった。

2) 薬学系研究棟玄関スロープ新設工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

調査期間 7月3日(植栽移設)、10月23日(スロープ基礎掘削ほか)

調査面積 140㎡(スロープ新設工事50㎡、植栽移設90㎡)

調査概要 広島大学薬学部研究棟玄関の身障者用スロープ新設と研究棟改修工事に関連した玄関西側の植栽移設に伴って調査を実施した。

玄関スロープ設置工事および薬学部研究棟周辺配管工事に先立って、薬学部玄関西側の植栽を移設した。移設植栽の内容は、コクチナシ2、デンダイウヤク2、アベリア1、ニッケイ1、スイリュウ2、マツ1、ミカン類1、サクランボ1、サクラ類1、ウメ1、コブシ1の合計14本である。移設のための掘削は径50cm～1 m、深さ50cm程度である。基本層序は以下の通りである。

第1層 暗灰褐色砂質土(表土)

第2層 暗褐色粘質土

第3層 明黄褐色砂質土

第4層 灰色～灰褐色砂質土

第5層 黒褐色(灰黒色)砂質土

第5層は地表下35～40cm付近から始まり、瓦片、煉瓦片、ガラス片などを含んでいる。第2層、第3層は薬学部研究棟建設に伴う整地土と推定される。霞地区における第2次世界大戦後の開発は昭和40年代前半から本格的に始まっており、第5層はこれに関連するものかもしれない。

植栽の移植先は、エネルギーセンター西側の空き地で、長さ約8m、幅約5m、深さ30～50cmの規模で掘削し、仮移植を行った。掘削部の堆積層はいずれもエネルギーセンター造成の際の盛土と判断された。

新設の身障者用スロープは、当初、玄関テラス南側に既存のインターロッキング舗装を一部除去して設置する予定であったが、玄関テラス西側に変更となった。開発計画予定地には樹木（モッコク）2本があり、これを移設するための掘削を行った。東側のモッコクは小型であり、移設用掘り方として東西約2.5m、南北約2.2mの隅丸長方形に掘削した。深さは40～50cmで、根の中心付近で約50cmまで掘削した他はほぼ40cm程度の深さである。堆積層は基本的に1枚で、すべて薬学部研究棟基礎を埋めた整地土と思われる。西側のモッコクはやや大型で、移設用掘り方として東西約2.5m、南北約3mの隅丸長方形に掘削した。深さは70～80cmまで掘削した。堆積層は部分的に3枚程度に区分できるが、自然堆積状態ではなく、ブロック状の堆積と判断された。この部分も基本的に研究棟基礎埋土と思われる。

モッコクの移設先はスロープ設置予定地の西側隣接地で、両モッコクとも、東西約2m、南北約3mの方形で、深さ約80cm規模の移設穴を掘削した。当初、50～60cmの深さで掘削予定であったが、機能を停止したU字管が埋設されたままであったため、これを除去することとし、最終的には深さ70～80cmまで掘削した。U字管は隣接のモッコク植栽部分まで及んでいたことから合わせて除去した。堆積層は数枚に分層可能であったが、研究棟基礎埋土と判断された。

スロープ基礎設置に伴う掘削深度は約45cmで、植栽移設に伴う掘削範囲内におさまっている。先行して行った植栽移設に伴う調査を含め、遺構・遺物とも発見されなかった。

3) 薬学系研究棟周辺配管工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

調査期間 2007年9月28日、10月2日、11月1日・7日、2008年2月8日、6月20日・26日

調査面積 1,645㎡

調査概要 広島大学薬学系研究棟および講義棟周辺の給排水管改修工事に伴って調査した。調査区はA～Fの6地区に分けて調査を実施した（第55図）。

A地区 薬学部講義棟北東側の調査区で、舗装道路部である。北側の給水管から分岐した配管の敷設部分で、幅約1m、深さは60～70cmまで掘削した。大半は既設配管敷設部分で、既設配管掘り方により旧地形が削平されており、残りの部分も掘削深度内は近年の埋積土と思われる黄褐色粘質土や暗褐色砂質土が堆積していた。

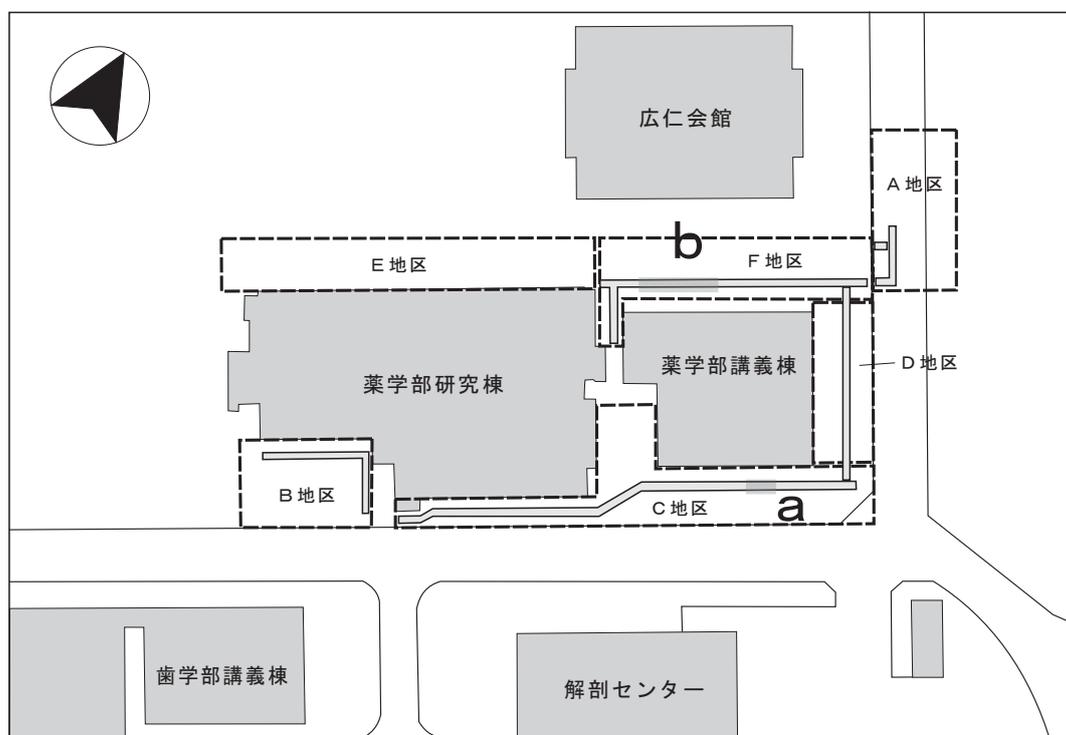
B地区 薬学部研究棟玄関周辺の調査区である。深さ50cm程度の掘削を行った。東側は既設配管部分の再掘削、北側は先行して行った玄関スロープの工事範囲内に位置している。

C地区 薬学部講義棟の南側の調査区である。幅約1m、深さは70～105cmまで掘削した。とくに、東半部の掘削が深く、90～105cmである。基本的な堆積状態は以下のごとくである。

第1層 表土層 2～5cm

第2層 暗灰褐色砂質土層（砂礫、灰色瓦片、煉瓦片を多く含む）30～40cm

第3層 暗褐色粘質土層（砂質強、灰色瓦片などを含む）10cm



第55図 薬学系研究棟周辺配管敷設工事調査区平面図（1：1200）

（A～F区が調査区である。aおよびbの網目部分は遺構あるいは遺物出土範囲である。）

第4層 淡黄褐色砂質土（マサ土）
20～30cm

第5層 暗灰色～褐色砂質土（灰色瓦片などを含む）25cm
以上

東端部の約4m前後に現代の攪乱坑があり、調査区床面よりさらに掘削が及んでいたが、その他の部分はおおむね水平な堆積状態であった。第3層は有機質を多く含む土層と思われる、第3層下面～第4層上面が生活面の可能性がある。第4層は整地土で、ほとんど遺物を含んでいない。第5層は包含層と思われる。とくに、調査区東端部から9m西側の地点から薬学部研究棟東端部付近までは灰色瓦片を主体とする遺物の密集層がほぼ全域に広がっており、下層に遺構面の存在が想定される（第55図a、写真10）。



写真10 C地区瓦片出土状況



写真11 F地区コンクリート面検出状況

D地区 薬学部講義棟東側の調査区であるが、連絡調整の不手際から立会調査を実施することができなかった。

E地区 薬学部研究棟北側の調査区である。幅約1.8mで、深さ50～80cmまで掘削した。調査範囲は薬学部研究棟の根切（基礎掘り方）部分および既設配管設置部分であり、堆積層はそれらの掘り方埋土であった。

F地区 薬学部講義棟北側の調査区である。幅1.8m、深さ1m前後まで掘削した。薬学部講義棟東端から約8m付近から西側では、地表下70cm付近でコンクリート面を検出した（第55図b、写真11）。コンクリート面検出部の基本層序は以下の通りである。

第1層 インターロッキング基礎（上にブロック煉瓦）

第2層 暗灰緑色砂質土（現代の整地土、インターロッキングに伴うものかもしれ

ない)

第3層 暗灰色～灰黒色粘質土（瓦片、煉瓦片混じり）

第4層 橙褐色粘質土～砂質土

第5層 コンクリート層

コンクリート面は講義棟西端までの約14mの範囲に広がっており、コンクリートの厚さは約15cmである。コンクリート層以下の掘削は行わなかったため、構造を明らかにすることはできず、性格は不明である。西端は薬学部研究棟根切（掘り方）部分で削平されているため、調査範囲からは東西方向の規模は確定できない。第4層はマサ土混じりの土層で、整地土と思われる。検出したコンクリート層の時期は確定できる遺物などが出土していないため、詳細な時期を考察できないが、現在の主要建物が建設された昭和40年代前半以前の遺構と思われる、兵器支廠関連の建物基礎の可能性はある。

4) 薬学系研究棟実験室ピット新設工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

調査期間 2007年11月27日

調査面積 56㎡

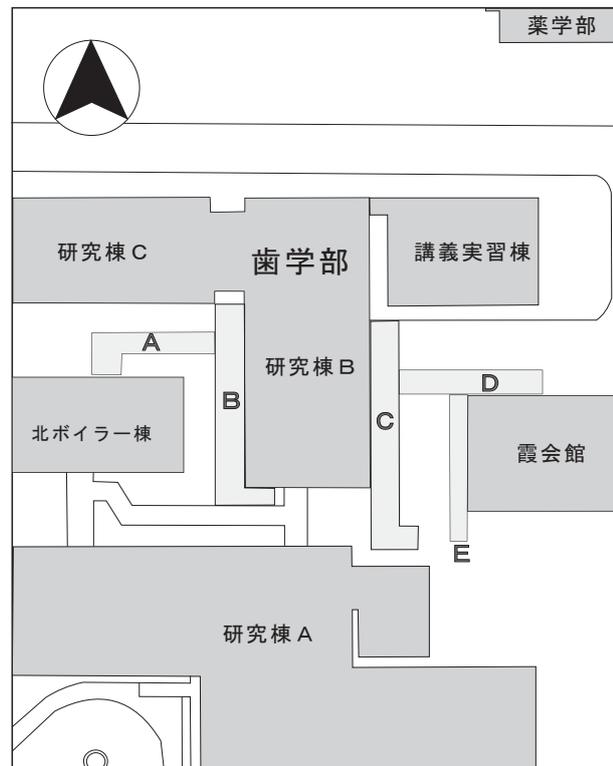
調査概要 広島大学薬学部研究棟に地下ピットを新設する工事である。当初、大学工事担当部署から建物基礎礎柱および壁部分以外は掘削を行っていないとの回答に基づき調査を行った。しかし、調査の結果、全て建物基礎掘削後の埋め戻し土と判断され、遺物、遺構とも検出されなかった。

5) 歯学系研究棟B配管工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

調査期間 2007年11月27日、2008年2月4日・6日・13日～15日

調査面積 325㎡



第56図 歯学部研究棟B配管工事調査区平面図(1:1000)

(A～E区が調査区である。)

調査概要 調査区は大きく研究棟Bの東側隣接地と西側隣接地の2ヶ所で、合計6ヶ所の掘削を行った（第56図A～E）。

東端部（霞会館西側隣接地）は南北に細長い調査区で、幅約80cm、長さ約12m、深さ2mである（第56図E、写真12）。南端部には共同溝が設置されており、共同溝から北側約1mは共同溝の掘り方である。その北側は堆積層が大きく3枚に区分され、上層よりアスファルトおよび基礎土、灰褐色砂質土（約1m）、暗青灰色砂質土（約80cm）の順である。灰褐色砂質土は礫混じりで、兵器支廠造成土と思われる。暗青灰色砂質土はやや粘性があり、兵器支廠造成前の水田堆積層最上部と思われる。遺構、遺物とも検出されなかった。研究棟Bの東側隣接地（第56図C）は、まず植栽移設のため、植栽部分の調査を行った。その後、排水管取替のため、霞会館北側部分（第56図D）を含めて調査を行った。研究棟B東壁から東2.5m付近までは建物基礎の掘り方（根切）であり、調査範囲は基本的に掘り方埋設土であった。しかし、調査区中央部の建物近接部分の、建物から約1.5m東で、地表下1m付近で煉瓦を並べた遺構を検出した（写真13）。研究棟B建設以前の施設と思われるが、今回の工事による掘削が検出面以下に及ばないことから調査は行わなかった。研究棟B掘り方以外の



写真12 E地区掘削状況



写真13 C地区検出遺構（煉瓦）

部分では、上層より灰褐色砂質土、褐色砂質土、暗褐色砂質土、赤褐色砂質土の順で堆積している。遺構、遺物ともに発見されなかった。

研究棟Bの西側は既設配管設置部の再掘削で（第56図A・B）、いずれも灰褐色系砂質土で、基本的に既設配管掘り方埋土と判断された。

6) 大学病院環境整備工事（植栽移設ほか）

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

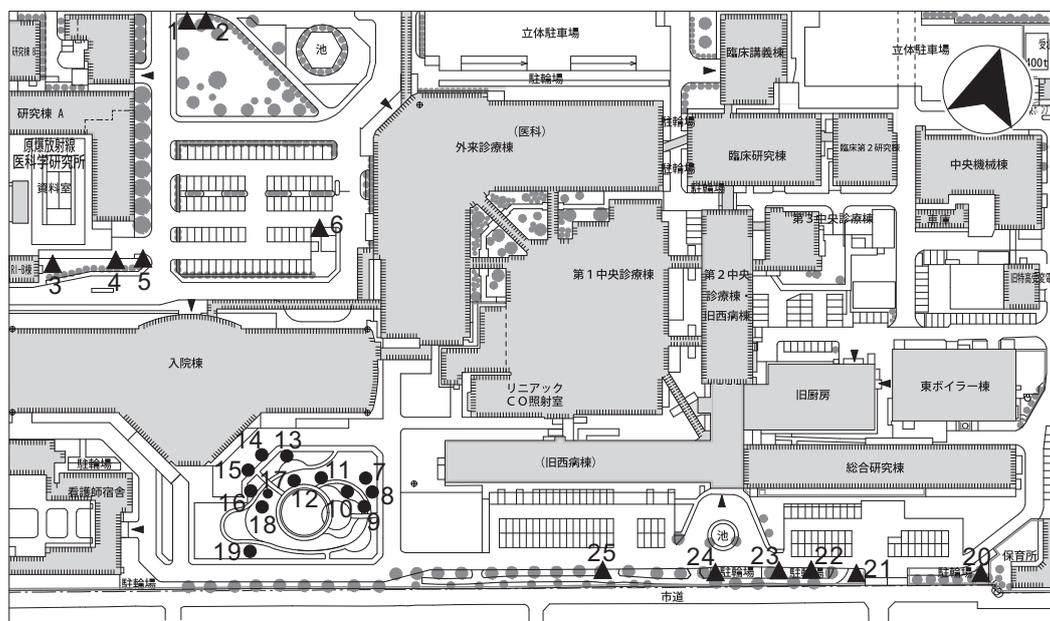
調査期間 2008年1月11日～24日、3月19日（第1期）

2008年2月4日～2月8日（第2期）

調査面積 2505m²

調査概要 工事は異なる業者によって2時期にわたって行われ、第1期工事関連調査は2008年1月11日～24日および3月19日、第2期工事関連調査は2008年2月4日～8日に行った。第1期は植栽の新植および移植工事で、大学病院入院棟北側の駐車場および広場（第1～6区）、大学病院入院棟南側広場（第7～19区）、総合研究棟南側通路（第20～25区）の3ヶ所である（第57図1～25）。以下、大学病院入院棟北側の駐車場および広場を第Ⅰ地区、大学病院入院棟南側広場を第Ⅱ地区、総合研究棟南側通路を第Ⅲ地区として概要を述べる。

第Ⅰ地区 第1・2区は植栽移植、第3～6区は植栽移植準備である。第3～6区



第57図 大学病院環境整備第1期工事調査区平面図（1：3000）

（1～25は調査区番号、▲印は植栽移設元、●印は植栽移設先および新植を示す。）

は次年度移植のための準備（根回し準備作業）であり、移植予定の樹木（クスノキ）の周囲のみの調査を行った。第1区は平面方形で、一辺2 m程度、深さ約70cm、第2区は平面方形で、一辺1.5 m程度、深さ約50cmの規模である。堆積層は3枚程度に区分され、褐色系の粘質土あるいは砂質土である。第3～6区は樹木の周りをドーナツ状に掘削して調査した（写真14）。各調査区の規模は、第3区が直径1.3 m程度、深さ約50cmと小規模であるが、その他は直径2～3 m、深さ70～80cmである。堆積層は3～4枚に区分され、褐色系砂質土を主体とする。いずれの調査区の樹木もある程度の大きさの成木を10年以内に移植したようであり、調査区内の堆積土の大半はその際の埋土と推定された。遺構・遺物はまったく検出されなかった。

第Ⅱ地区 第7～19区で、樹木新植のための掘り方を調査した。第18区は直径約1 mと小規模であるが、その他は直径1.5～2 m、深さ70～80cmの規模である。堆積層はいずれの調査区でもほぼ同様の状況であり、以下の通りである。

第1層 芝土（芝生）

第2層 橙褐色砂質土（マサ土）

第3層 暗灰褐色～灰色粘質土（砂



写真14 第Ⅰ地区（第4区）完掘状況



写真15 第Ⅱ地区（第7区）完掘状況



写真16 第Ⅱ地区（第11区）完掘状況

質土)

第2層は北端部の第13・14区を除くと、40～50cm前後の厚さがあり、第13・14区では15cm程度と薄い。第3層は調査区によって層相が多少異なるが、礫、煉瓦片などを含んでいる。第13区では第3層が40～50cmの厚さがあり、上下2枚に細分できる。また、第2層と第3層の間に厚さ5cm程度の暗褐色硬化層が認められる。第10区では調査区底面北東部でコンクリート面を確認した。コンクリート面の周囲には黒色土が堆積していた。この他には遺構と思われるものは検出されず、遺物についても昭和50年代以前と判断されるものは出土しなかった。

コンクリート面は建物の基礎と思われるが、現時点では時期や性格を特定できる状況ではない。しかし、第2期工事関連調査区でもコンクリート面が検出され、その下層の調査を行った結果、昭和前半期に遡る可能性のある煉瓦積構築物の一部などが廃棄されるような状況で出土したこと、調査区の広い範囲に比較的近年の盛土と思われるマサ土(第2層)が40～50cm認められること、第Ⅱ地区付近には昭和40～50年代に中央廃液処理施設が位置していたことなどから、第10区検出のコンクリート層は同施設の一部である可能性が高い。

第Ⅲ地区 第20～25区はいずれも植栽移設のための準備工事であり、樹木の周囲をドーナツ状に調査した。第20区は直径約3m、深さ約1.4mの規模で、地表下約1mで調査区中央部の東西において切石状の角礫を検出し、石組遺構と判断された。調査区西側の角礫は除去されたが、その東側の未調査部(樹木の下)に同様の角礫を認めることができた。さらにその東側の延長線上に調査区東側で検出した角礫が位置しており、各角礫の北側面は東西方向にほぼ一直線に並んでいると考えられる。角礫は長さ40cm、幅30cm、厚さ30cm程度の規模である。調査区東側の角礫南側近接部では角礫の上面レベル付近に炭化物および焼土が堆積していた(写真17)。第21区は直径約2.5m、深さ70～80cmの規模で、調査区中央部の西半部の地表下約50cmで切石状の角礫2点を検出した。北側の面が第20区の石垣状遺構北側面の西側延長線に一致しており、東西方向に石組遺構が連続していると判断される。本調査区では調査区北端部で切石状の角礫3点を検出した。3点のうち2点が隣接し、残り1点は東側に少し離れて位置するが、東西方向に連続的に配列されている。これらの角礫は調査区中央部の石垣状遺構上面よりレベルがやや高いが、調査区中央部の石垣状遺構と並行するように配されている。両者の間は約70cmで両者の間に土管が埋積されていた。第22区は平面楕円形を呈し、4.2m×2.8m、深さ約80cmの規模で、地表

下約 50cm で調査区中央部の東西において切石状の角礫 3 点を検出した。調査区東部 1 点（写真 18）、調査区西部 2 点であるが、後者のうち 1 点は西側の調査区外に大半が位置しており、東端部を確認したのみである。第 20・21 区の石組遺構の西側延長線上に位置する。第 23 区は直径 2.5 m、深さ 80cm ～ 1.2 m の規模で、調査区中央部から北部にかけて切石状の角礫を検出した。第 20 ～ 22 区と同様、東西方向に配列されているが、調査区中央部と調査区北部の 2 ヶ所に平行する形で東西方向に配置されている（写真 19）。調査区中央部では中央の樹木部分を挟んで調査区の東西で角礫 4 点を確認した。東部 2 点、西部 2 点で、それぞれ密接している。調査区北部の角礫は、調査区中央部の石組遺構の北側約 70cm に位置しており、角礫 5 点が南側の面を揃えるように東西に密接している。両者の間にはまったく石は認められず、少し掘り下げたところ一定の深さまで同様の状態であることを確認したことから、これまで検出した石組は溝の構成材と推定される。

第 24 区は直径約 3 m、深さ約 85cm の規模である。第 20 ～ 23 区で検出した石組遺構の構成石材と同様の切石状角礫 2 点を調査区南西部で



写真 17 第Ⅲ地区（第 20 区）検出石組遺構



写真 18 第Ⅲ地区（第 22 区）検出石組遺構



写真 19 第Ⅲ地区（第 23 区）検出石組遺構

確認したが、原位置を保っていなかった。第25区は直径約3.5m、深さ60cmの規模である。石組遺構を構成する切石状角礫などは確認されず、その他の遺構も検出されなかった。第20～25区では表土層下に50～60cm程度の暗褐色系粘質土（砂質土）が堆積しており、第20～23区ではその下層に石組遺構が位置していた。また、第21・22・23・25区では石組遺構の上面やその周辺から「広島大学病院」銘のある磁器片などが多数出土した。これは上層の暗褐色系粘質土にはほとんど包含されておらず、角礫を覆う直上の堆積土や石垣状遺構間の堆積層（溝埋土）最上部に集中的に包含されていた。

第20～23区で検出された石組状遺構は第21・23区では南北に並行する形で2列を確認した。両者の間は約70cmで、構築物などを確認することはできず、南側石組遺構は北面が、北側石組遺構は南面がきれいに揃うように配列されている。北側の石組遺構が検出されなかった第20・22区についても基本的に同様の構造が推定される。第20～23区の石組遺構北面はほぼ東西一直線上に配列されている。角礫が二段以上積まれているのかどうかは確認していないが、溝と判断して大過なからう。少なくとも東西約100mにわたって溝が良好な形で残存しているものと判断される。霞地区の建物配置図によると、昭和37年以前の配置図には溝と推定される表現が敷地南端部に認められるが、昭和40年代以降の配置図には表現されていない。昭和40年頃から現在の建物配置の基本となる建設が始まっており、これにあわせるように敷地南端部にあった溝が埋められ、さらに盛土が行われ、敷地が嵩上げされたものと推定される。出土の磁器類は「大学病院」銘を含むことから広島大学が霞地区に成立した1953年（昭和28）以降に廃棄されたものと推定される⁽¹⁾。石組遺構直上や溝堆積土最上部に集中することから、1965年（昭和40）頃の盛土直前に廃棄されたものであろう⁽²⁾。

第2期は植栽移植工事および駐車場新設工事で、植栽関係工事は大学病院入院棟の北側の駐車場および広場（第26～36区）、大学病院入院棟南側広場中央・東部（第37～50区）、駐車場造成工事は大学病院入院棟南側広場西部（51区）である（第58図）。以下、大学病院入院棟の北側の駐車場および広場を第Ⅳ地区、大学病院入院棟南側広場中央部・東部を第Ⅴ地区、大学病院棟広場西部を第Ⅵ区として概要を述べる。

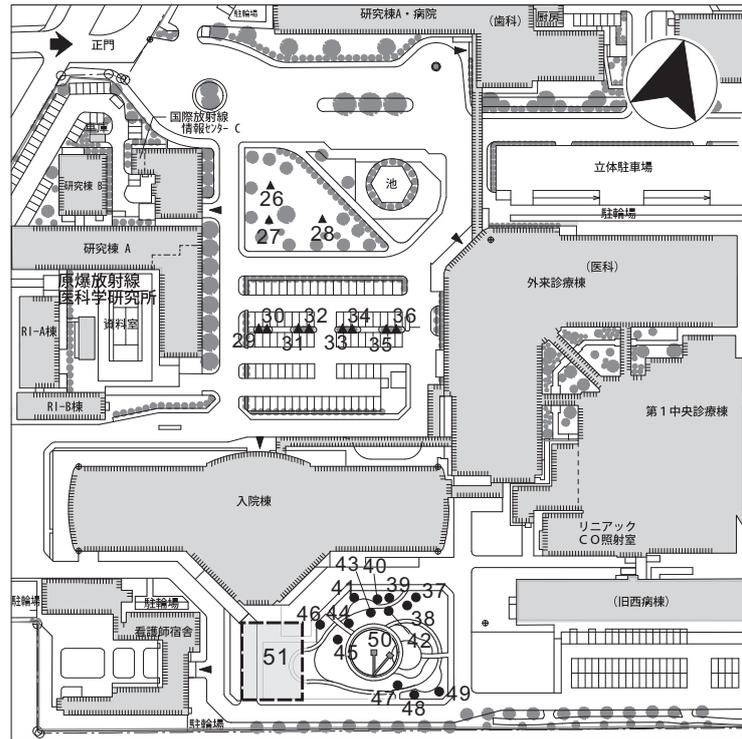
第Ⅳ地区 植栽（ケヤキ）の移植工事で、掘取りした植栽を第Ⅴ地区へ移植した。調査区は第26～36区の合計11ヶ所で、第26～28区が霞地区正門ロータリーバス停の南側広場、第29～36区が大学病院入院棟北側の駐車場に位置する。第26～28区は直径約2m、深さ約80cmの規模で、堆積土は褐色系砂質土を中心としている。

第29～36区は舗装されているため、アスファルト舗装を除去し調査を行った。各調査区は平面一辺約4mの方形で、深さ80～100cmの規模である。植栽は移設されたもので掘り方が認められ、掘り方部分は深さ50～80cmまで褐色系粘質土(砂質土)が堆積しており、それ以下は黄褐色粘質土(硬く締る)が堆積している。植栽掘り方の周囲は、深さ約50cmまで舗装基礎土が堆積し、それ以下が黄褐色粘質土である。黄褐色粘質土は、兵器支廠造成の際の整地土と推定されるが、調査区内では遺構、遺物が検出されなかった。

第V地区 第IV地区の植栽の移植先であり、移植のための掘り方部分の調査を行った。樹木の移植に伴って広場中央の時計台を移設した。また、西側隣接地(第VI地区)に駐車場を新設するため電気配線管の埋設位置を変更し、その一部を本地区北部に埋設した。植栽移植のための掘り方部分は第I期工事の第II地区の調査区と地域的にはほぼ重複しており、調査区も相互に近接していることから、基本的に同様の調査結果を得た。調査区は第37～第49区の合計13ヶ所で、広場の北半部に大半が位置する。基本層序は第II地区で述べたように、以下の通りである。

- 第1層 芝土(芝生)
- 第2層 橙褐色砂質土(マサ土)
- 第3層 暗灰褐色～灰色粘質土(砂質土)

北端部の第38～42区では第2層が厚さ20～30cm程度と薄いですが、その他の調査区では厚さ40～50cm程度である。第40区では底部近くでコンクリート面を検出した。



第58図 大学病院環境整備第2期工事調査区平面図(1:3000)
(26～49は調査区番号、▲印は植栽移設元、●印は植栽移設先を示す。50は時計塔移設工事地区、51は駐車場整備地区である。)

植栽移設に合わせて広場中央部の時計台の移設を行い（第50区）、既存の時計台の基礎部分、移設先の基礎掘り方、既存の電気配線部と移設先の配管掘り方部の調査をした。既存の時計台基礎および電気配線部については既存の掘り方内のみの掘削で、堆積土はそれらの施設の埋土である。移設先の時計台基礎および電気配線管の掘り方では地表下約40cmまでは橙褐色砂質土（マサ土）が堆積しており、その直下にコンクリート面が全域で露出した。電気線配管部はコンクリート上面で掘削予定深度に達したためそれ以上の掘削は行わなかった。時計台基礎部分についてはコンクリート面を除去して地表下1.4mまで掘削した（写真21）。時計台基礎部分の基本層序は以下の通りである。

- 第1層 芝
- 第2層 橙褐色砂質土（マサ土）
- 第3層 暗灰褐色粘質土
- 第4層 コンクリート硬化層
- 第5層 淡黄褐色砂質土
- 第6層 暗灰褐色粘質土
- 第7層 煉瓦・コンクリート混じり硬化層
- 第8層 暗灰青色粘質土

コンクリート硬化層は約10cmの厚さがあり、第7層は廃材の堆積層



写真20 第IV地区（第36区）掘削状況



写真21 第V地区時計台掘り方（第51区）完掘状況



写真22 第VI地区（第52区）外灯基礎掘り方完掘状況

と思われる。少なくとも以前にあった施設を造成する際に第7層下面までは旧地形を掘削しているものと思われる。また、第6層中にも煉瓦積構築物片が包含されていた。また、本地区の北端部で駐車場造成に伴う電気線配管移設部分の調査を行ったが、第VI地区で合わせて説明する。

第VI地区（第51区） 駐車場新設地区で、現状は第V地区に連続する広場西端部および大学病院入院棟南玄関に通じる西側通路（アスファルト舗装路）である。舗装路についてはアスファルト舗装を一旦除去し、改めて舗装を行うのみの工事で、広場の西端部についても表層土の削平のみであるが、駐車場造成に伴って既設外灯および電気配線管の移設を行うため、移設先の外灯基礎および電気配線管部分の調査を行った。外灯基礎の調査は第VI地区北端部と南端部の各1ヶ所で行った。北端部では地表下1.4mまで調査し、地表下約70cmでコンクリート面を検出した（写真22）。コンクリートは約10cmの厚さを有し、コンクリートの上層には灰褐色系粘質土および砂質土、下層には黄褐色砂質土（マサ土）が堆積していた。下層のマサ土層は整地層と思われる。コンクリート面は外灯基礎の東側の第V地区まで延びる電気配線管掘り方や南側の電気配線管掘り方でも検出しており、東西15m以上、南北10m以上の規模をもつものと推定される。南端部では地表下約1.35mまで調査した。堆積層は灰褐色系砂質土で、数枚に区分可能であるが、しまりがなく、比較的最近の埋積土と判断された。調査区南部の電気配線管掘り方部分は深さ40～50cm程度まで調査したが、堆積層はいずれも褐色系砂質土を主体としており、遺構、遺物とも検出されなかった。

第1期工事第II地区および第2期工事第V地区、第VI地区で検出されたコンクリート面は、第1期第II地区の調査概要で述べたように、近年まで存在した中央廃液処理施設に関連した遺構である可能性があるが、検出レベルが異なることから全てが同施設に関連するものかどうか今後さらに検討する必要がある。

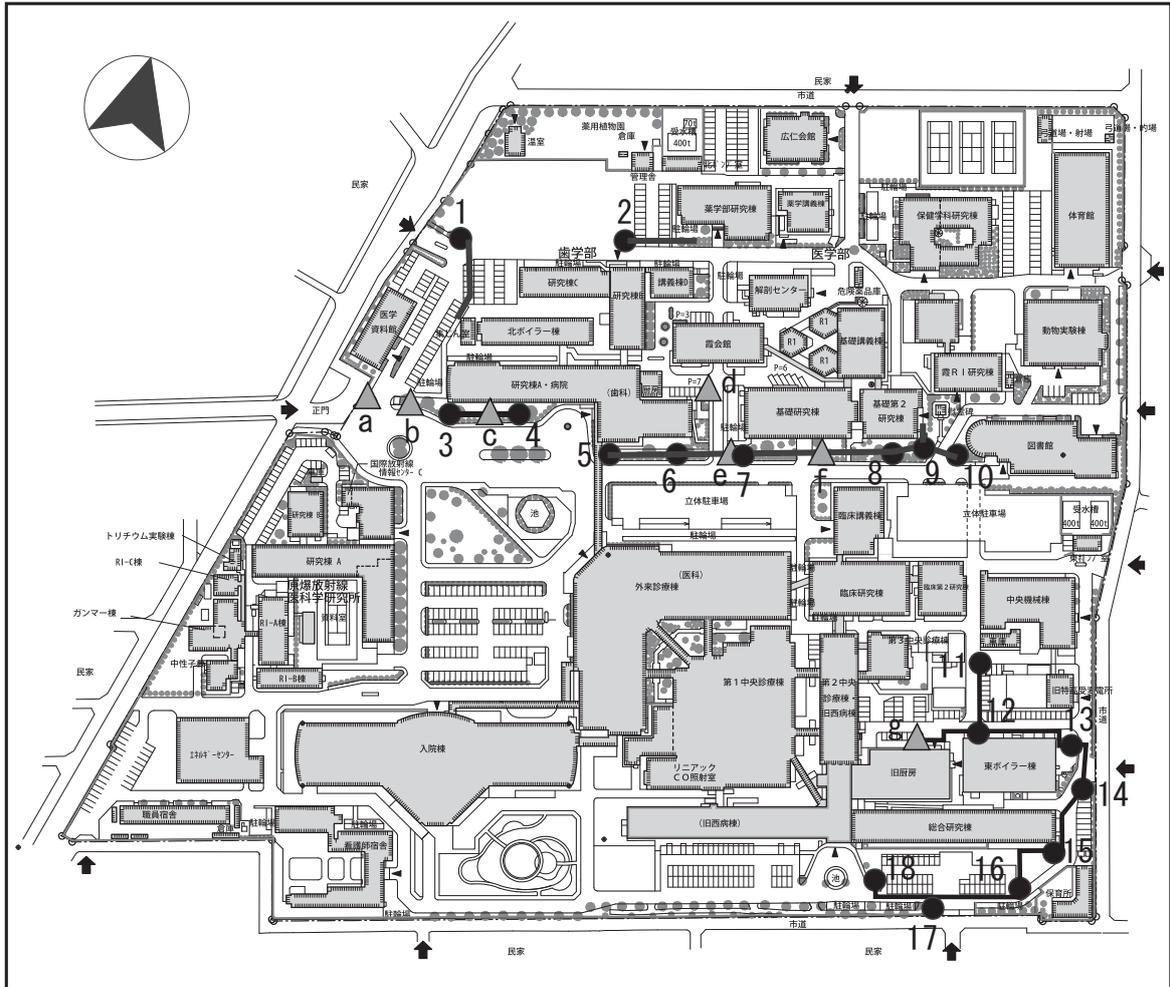
7) 大学病院外灯設置工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

調査期間 2008年1月16日～18日・21日～29日・31日、2月2日～5日

調査面積 320㎡

調査概要 広島大学病院基幹整備の一環である外灯新設および既設外灯取替・撤去工事に伴って調査した。工事は、薬学部周辺（第59図1・2）、大学病院外来診療棟（歯科）・医学部研究棟南側（第59図3～10、a～f）、総合研究棟周辺（第59図10～18、g）の3地区に分かれる（第59図）。以下、地区ごとに調査の概要を述べる。



第59図 外灯設置工事調査区平面図 (1:4000)

(●印は外灯新設、▲印は既設外灯取替、直線は電気配線埋設部分を示す。1～18は新設外灯、a～gは既設外灯の調査区番号である。)

薬学部周辺 新設No.1・2外灯基礎 (第59図1・2) および外灯設置に伴う電気配管掘り方の掘削部分の調査を行った。新設No.1外灯基礎掘り方 (第59図1) は平面1.2×1.4mの規模で、深さ約1.45mまで掘削し、最下層で暗灰青色砂層が露出した。以前、電柱基礎が埋設されていたようであり、北側は現地表から削平されていたが、南側半分に堆積層が残されていた。堆積状況の概要は以下通りである。

- 第1層 暗褐色砂質土、砂礫混じり (10cm)
- 第2層 コンクリート混じり砂礫層、硬化層 (15cm)
- 第3層 暗褐色砂質土 (15～20cm)
- 第4層 暗灰褐色粘質土 (上部に黒色層が薄く堆積する、5～10cm)
- 第5層 暗褐色粘質土 (15cm)

第6層 淡黄褐色砂質土（マサ土、45cm）

第7層 黄褐色砂礫層（マサ土混じり、30cm）

第8層 暗灰青色砂層

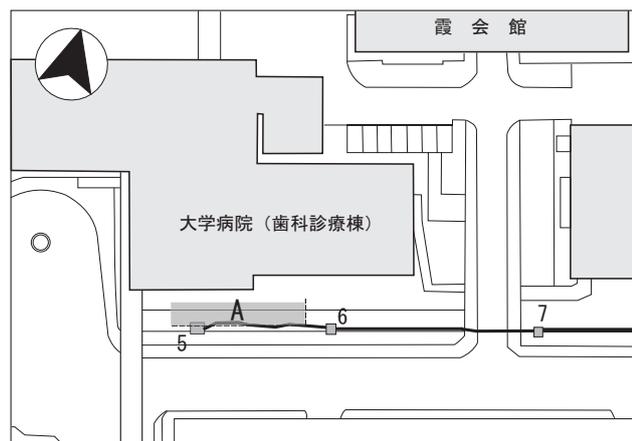
第6層および第7層は兵器支廠造成のための整地土と思われる。第4層および第5層は包含層と思われるが、遺物などは出土しなかった。第8層は海成砂層あるいはその再堆積層と思われる。

新設No.2外灯基礎掘り方（第59図2）も深さ約1.45mまで掘削し、No.1基礎とほぼ同様の堆積状態を確認した。電気配管掘り方部分は深さ30～70cmまで掘削した。部分的に新設No.1外灯基礎部分の第6層上面を確認したが、大半は部分的に第3・4層が確認された程度で、現代の整地土などであった。いずれの地区でも遺物などは出土しなかった。

大学病院外来診療棟（歯科）・医学部研究棟南側 新設No.3～9外灯基礎（第59図3～8・10）と新設外灯間の電気配管部、医学部研究棟東端部の電気配線ハブ（第59図9）および既設No.1～6外灯（第59図a～f）の取替、除去に伴う調査を行った。

既設No.1～3外灯、新設No.3・4外灯および電気配管部分は大学病院外来診療棟（歯科）・歯学部研究棟Aの南側である。既設No.1～3外灯基礎については掘り方内の掘削であり、すべて掘り方埋土であった。新設No.4外灯基礎掘り方（第59図4）は平面1.35×1m、深さ約1.35mまで掘削した。表土下は黄褐色系砂質土で、数枚に分層可能であるが、ほぼ同質の土が堆積しており、自然堆積層は確認できなかった。新設No.3外灯基礎掘り方（第59図3）

においても同様な様相であり、付近は大学病院外来診療棟（歯科）・歯学部研究棟A耐震工事および光ケーブル敷設工事の際にかなり深くまで広範に掘削が行われているようである。電気配線掘り方部分については深さ40cm前後の掘削を行ったが、表土層下はいずれもマサ土状の砂質土であり、工事に伴う整地土と判断された。表土下40～50cmまではほぼ全域にわたって耐震工事などに伴って掘削



第60図 No.5・6新設外灯周辺検出遺構平面図
(1:1000)

(網目(A)はNo.5外灯基礎およびその東側で検出したコンクリート基礎である。5～7は新設外灯基礎を示す。)

が行われているようであるが、今回の調査はきわめて限定的であることから、外灯基礎掘り方床面以下の状況については今後の調査によって確認する必要がある。

新設No.5・6外灯基礎および電気配管部分は大学病院外来診療棟（歯科）東半部の南側である。新設No.5外灯基礎掘り方（第59図5）は、平面1.6m×1.3mの規模で、深さ約1.4mまで掘削し、調査区北部でほぼ東西に延びるコンクリート基礎を検出した（写真23）。コンクリート基礎上面まで完存しており、上面は地表下約60cmの位置にある。基礎直上は黒色硬化層（アスファルト状）、コンクリート状硬化層の順で堆積が認められ、厚さ約20cmである。基礎の外側（南側）は、基礎上部の硬化層に対応するように硬化面が広がっており、上層より、黒色硬化層、灰褐色角礫混じり硬化層、灰褐色礫混り硬化層（粘質土）の順に整地されており、全体で20cm前後の厚さである。基礎外側硬化面の下層は淡黄褐色砂質土（マサ土）で、調査区下底部付近には大小の角礫が規則性のない集石状態となって多数認められた。兵器支廠造成土の可能性が高い。新設No.6外灯基礎掘り方（第59図6）は、平面が1.1m×1.2mの規模で、深さは約1.6mまで掘削した。本調査区ではコンクリート基礎は認められなかったが、コンクリート基礎外側に広がる硬化層が確認された。堆積層の状態は新設No.5外灯基礎部分とほぼ同様であるが、硬化面の深さは地表下約50cmと少し浅い。硬化面（層）は3枚認められ、東側は歯科外来診療棟東端部付近まで確認した。



写真23 新設No.5外灯基礎検出コンクリート基礎

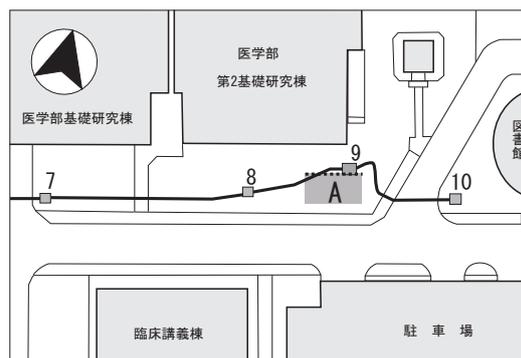
電気配管掘り方部分は深さ50cm程度までの掘削で、硬化面直上の堆積層内までの中におさまっている。新設No.5外灯基礎部分で検出したコンクリート基礎は電気配管部分でも地表下45～60cmで確認することができた。部分的に深掘りして確認した結果、新設No.5外灯基礎から東約13mまで広がりを確認した。西側や北側への広が

りについては、今後の調査で確認する必要があるが、歯科外来診療棟南端から約2m南まで耐震補強の際に建物基礎基底部まで掘削を行っていることから、建物南端から南側2mの範囲はコンクリート基礎遺構が存在していたとしてもすでに削平されたと推定される。

新設No.7～9外灯基礎、既設No.5・6外灯基礎、電気配線ハブ(柵)および電気配管部分は医学部基礎研究棟の南側である。新設No.7外灯基礎(第59図7)は既設No.5外灯基礎(第59図e)東側隣接部で、当初の予定地の掘削を行ったところ、地表下約20cmでコンクリート基礎が露出し、場所を南側に移動して掘削をしたが、やはり地表下約50～60cmでコンクリート基礎が露出した。ついで既設No.5外灯北側に場所を移し掘削を行ったが、コンクリート基礎、排水管などが露出し、やはり下層への掘削が不

可能であることが判明した。このことから、近接位置での新たな掘削は困難と判断し、既設No.5外灯除去後新設外灯を設置することに計画変更した。既設No.5外灯周辺の調査では最近の構築物のほかにも、既設No.5外灯の南東隣接部の地表下60cm程度でコンクリート基礎を検出した(これらのコンクリート基礎は共同溝と思われる)。新設No.8外灯基礎部分については掘削時に立ち会うことができず、調査をすることができなかったが、周囲に残されていた廃土はマサ土状の砂質土が主体であった。新設No.5・6外灯基礎掘り方最下層の淡黄褐色砂質土(マサ土)に対応する堆積層が存在するものと思われる。

電気配線ハブ(柵)(第59図9)は医学部基礎第2研究棟東端部付近に位置する。当初、平面1.2m四角、深さ約1.35m程度の予定で掘削を行ったが、深さ70cm程度で煉瓦



第61図 電気配管ハブ(柵)周辺検出遺構平面図(1:1000)

(網目(A)は電気配管ハブで検出した煉瓦敷遺構である。7～10は新設・既設外灯基礎、電気配線ハブを示す。)



写真24 電気配線ハブ(柵)検出煉瓦敷遺構

積が露出したため、煉瓦敷遺構部分を掘削範囲の南端として北側へ拡張するように計画を変更することになった。上部は煉瓦が折り重なっているような状態であるが、煉瓦集中部の最下層部分は煉瓦が水平に横1列にきれいに敷かれている状態であった(写真24)。煉瓦敷は直線的にほぼ東西方向に延びており、煉瓦の下は小礫層、大型礫(15cm前後)層の基礎、その下層はマサ土と続いている。規模や性格については調査範囲がきわめて狭いことから不明であるが、調査区の北側への広がり確認できず、調査区の東西や南に広がっているものと思われる(第61図A)。なお、本調査区における堆積層の概要は以下の通りである。

第1層 灰褐色粘質土 15cm

第2層 灰褐色砂質土 30cm

第3層 煉瓦崩落層(建物などを取り壊して廃材がそのまま集積しているような状態) 20cm

第4層 煉瓦敷(1段のみ) 5cm

第5層 角礫層(上層は小礫、下層は中型礫) 15cm

第6層 マサ土+角礫層(大型礫を含む)

第7層 淡黄褐色砂質土(粘性が強い)

第5層以下は、地表からの深度から見て新設No.5・6外灯基礎掘り方最下層に対応するものと思われるが、層相が異なっており、煉瓦敷遺構の基礎層と思われる。

新設No.9外灯基礎(第59図10)は電気配線ハブの約10m東に位置し、図書館の西側に近接する。平面1.2m×1.3m、深さは145～150cmまで掘削した。地表下約1.1mで東側壁のコンクリート壁が露出した。規模や性格は不明であるが、これまでの調査で検出した構築物としてはかなり深い位置にあり、現在使用中の何らかの施設かもしれない。堆積層は褐色系の砂質土を主体としており、複数枚に区分することは可能であるが、いずれもほぼ同質の土層である。地表下1m以下の部分でも新設No.5・6外灯基礎などで検出した淡黄褐色砂質土などの兵器支廠造成土と推定される堆積層が認められず、調査区付近が比較的最近かなり深くまで掘削されたものと思われる。

電気配管掘り方部分についてはおおむね深さ50cm程度の掘削で、昭和40年代以降の開発に伴う整地土・盛土内の掘削に留まっている。霞会館への通路部分や医学部基礎研究棟玄関への通路部分については深さ70cm程度まで掘削したが、道路基礎層と現代の盛土・整地層であった。しかし、新設No.7外灯東側の電気配管掘り方部分では、新設No.7外灯基礎隣接地あたりから大小の角礫が多量に出土した。角礫集中層は地表

下 40cm 前後から始まっているが、規則的な石積みは認められない。角礫層は新設No. 7 外灯基礎から東 3 m 程度まで確認されたが、それより東側では礫は出土するものの、明確な角礫層は認められなかった。

総合研究棟周辺 既設No. 7 外灯基礎（第 59 図 g）撤去および新設No. 10～17 外灯基礎（第 59 図 11～18）設置、電気配管敷設に伴って調査した。なお、新設No. 10～12 外灯基礎（第 59 図 11～13）ならびに既設No. 7 外灯基礎については掘削の際に立ち会うことができなかつたので、詳細は不明である。

新設No. 14 外灯基礎掘り方（第 59 図 15）は総合研究棟南東隅に位置し、平面は 1.1 m × 1.4 m の規模で、深さ 1.5 m まで掘削した。地表下約 50cm で石垣裏込め状の角礫・亜角礫集中部分を検出した（写真 25）。同様の状況は地表下約 1.5 m まで続いており、それ以下は暗灰褐色砂質土（砂層）に移行するようである。堆積層の概要は以下の通りである。

第 1 層 暗褐色粘質土（表土層・植栽土） 25～30cm

第 2 層 （暗）灰褐色粘質土（小礫混じりで硬く締まる）
20cm

第 3 層 角礫・亜角礫層 100cm

第 4 層 暗灰褐色砂質土（砂層）

角礫・亜角礫集中部は調査区内では掘削部縁辺部に沿って長さ 30～



写真 25 第VI地区（第52区）新設 No.14 外灯基礎掘り方完掘状況



写真 26 第VI地区（第52区）新設 No.17 外灯基礎掘り方完掘状況

50cm 大の礫がコの字状に連続し、2 段程度上下に積み重なり、その内部に 5～30cm 程度の角礫・亜角礫を乱雑に充填しているように見える。大型礫は調査区の南、西側に認められるが、調査区東部には排水管が設置されていたため、東側への広がりは確認できなかった。北側は総合研究棟基礎で、すでに削平されている。また、南側の礫の充填はまばらであることから遺構の南端近くに位置しているのかもしれない。隣接地の新規造成された原医研敷地内でコンクリート舗装面の基礎として大型角礫を主体とする礫層が検出されているが、この礫層は厚さ約 20cm で、大型礫がほぼ 1 段で上下の重複が基本的にないなど、本調査区の状況とはかなり異なっている。いずれにしても、遺構の広がりや遺構の性格については今後の調査に俟ちたい。

新設No.16 外灯基礎（第 59 図 17）は総合研究棟南の南門西側隣接地に位置し、地表下約 1.5 m まで掘削したが、遺構・遺物とも確認されなかった。また、灰色系砂質層（砂層）にも達していない。堆積層の概要は次の通りである。

- 第 1 層 黄褐色砂質土 20cm 表土（植栽土）
- 第 2 層 灰色砂礫層 20cm アンツーカー基礎
- 第 3 層 灰褐色砂質土 30cm
- 第 4 層 灰褐色砂質土（マサ土混じり） 20～30cm
- 第 5 層 灰褐色砂質土 30cm
- 第 6 層 淡黄灰色砂質土 20cm
- 第 7 層 灰褐色粘質土

兵器支廠造成に伴う整地土と推定される堆積層は認められないが、この付近は敷地南限の溝が東西に延びている場所であり、溝の構築のための掘り方に位置しているのかもしれない。それを裏付けるように、南壁に溝の構築石材と思われる角礫 1 点が露出した。また、本年度の調査で本調査区南側において敷地南縁を区画する溝を検出している。

新設No.17 外灯基礎（第 59 図 18）は総合研究棟西端部付近に位置している。現地地表より約 40cm 高く盛土が行われている場所であり、擁壁に接した部分を掘削した（写真 26）。地表下約 1.45 m まで掘削したが、砂層は露出しなかった。堆積層の概要は次の通りである。

- 第 1 層 芝 1～3cm
- 第 2 層 褐色粘質土 20cm
- 第 3 層 黄褐色砂質土 20cm

第4層 灰褐色粘質土 30cm

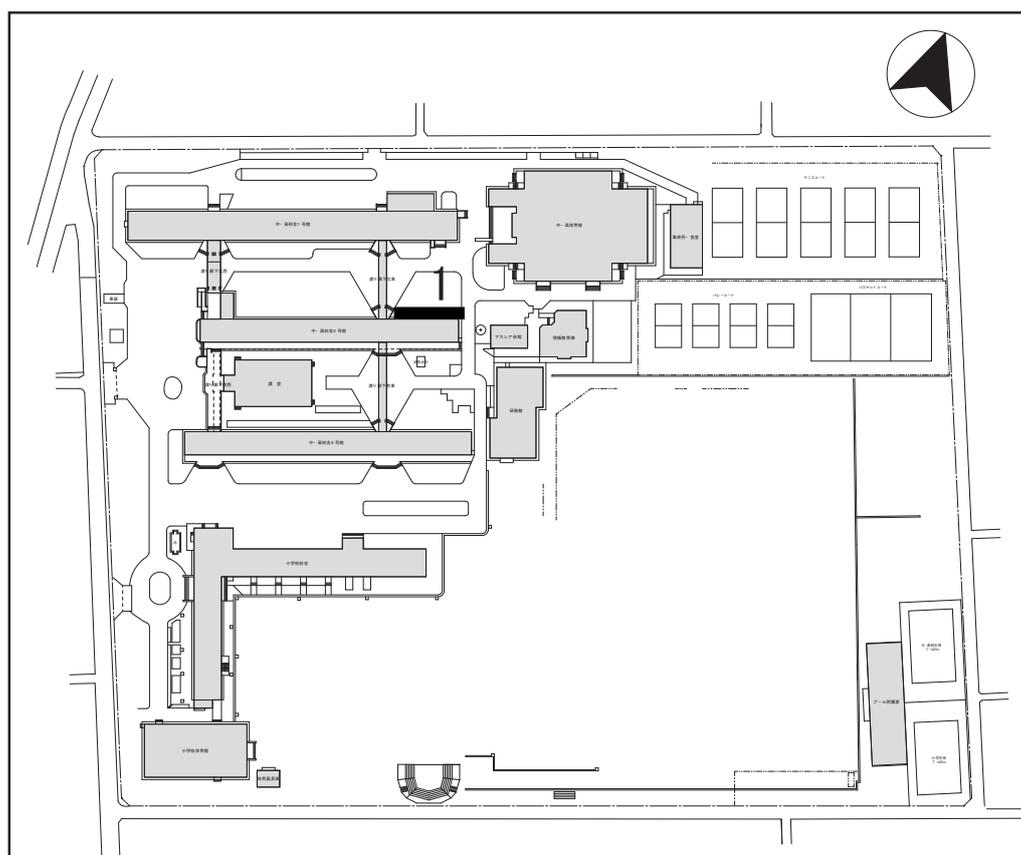
第5層 灰黒色粘質土 2～3cm

第6層 黄褐色砂質土（マサ土） 20cm

第7層 褐色砂礫層（大型の角礫を多量に含む） 50cm以上

第5層は旧地表の可能性が強く、第4層は瓦片などを包含している。また、第6層・第7層は整地土（造成土）と思われる。湿地・湖水面などの埋積法に類似しており、兵器支廠造成の際の整地土の可能性はある。

新設No.13外灯基礎（第59図14）部分は深さ約1.5mまで掘削したが、排水管など既設施設によって掘削が行われており、自然堆積層などは残存していなかった。既設No.7外灯基礎（第59図g）部分はすべて既設外灯基礎掘り方内の掘削で、掘り方埋土のみであった。各外灯を繋ぐ電気配線の配管掘り方についてはおおむね深さ50cm程度であり、掘削深度は新設No.14外灯基礎部分の第1・2層相当層内でおさまっている。新設No.15外灯と新設No.16外灯の間の電気配管掘り方については深さ50～100cmで、



第62図 2007年度翠地区の立会調査位置図（1：3000）

（1は附属中高校2号館耐震補強工事地区である。）

ほかの部分に比べてやや深くまで掘削した。とくに新設No.15 隣接部が深く、表土下50～60cm 付近以下で兵器支廠造成の際の整地土（造成土）と推定される淡黄褐色～黄褐色砂質土などを検出した。

翠地区（広島市）

1) 附属中高校2号館耐震補強工事

所在地 広島市南区翠1丁目1番1号

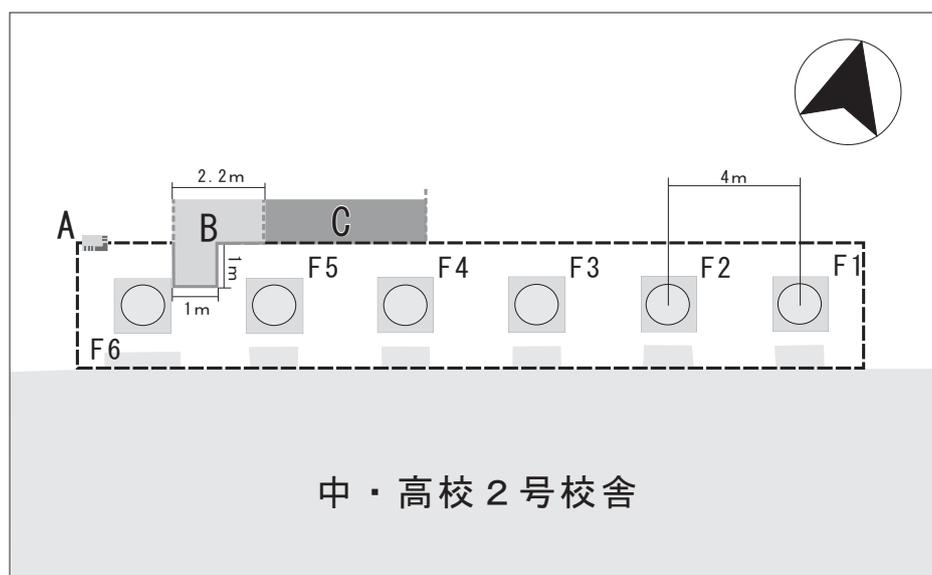
調査期間 2007年11月22日

調査面積 94m²

調査概要 附属学校部（翠地区）中・高校舎2号館東北壁沿いに耐震のため、直径1.3mの鉄筋コンクリートの柱6本を4m間隔で設置するもので、柱基礎設置に伴う掘り方部分の調査を行った。コンクリート基礎柱上部（地表下約1.7mまで）については1.7m四方のコンクリート基礎付加するための型枠設置作業を行うスペースが必要で、6本の基礎柱を含む東西約24m、東西約4mの範囲を調査区とした。深さは約2mまで掘り下げた。基本的な堆積状態は調査区内ではほぼ同様であり、以下に示す通りである。

第1層 暗灰褐色砂質土（表土層、粘性あり）

第2層 灰褐色～暗灰褐色砂質土



第63図 附属中高校2号館耐震補強工事検出遺構平面図（1：200）

（Aは煉瓦積施設、Bはコンクリート構築物、Cは褐色硬化面である。）

第3層 橙褐色砂質土（マサ土、硬くしまる）

第4層 暗褐色～黒褐色砂層

第5層 暗灰褐色砂層

第6層 淡明褐色砂層

第6層以下は淡褐色系～灰色系砂層であり、海成砂層と思われ、第5層も海成層の可能性もある。第4層は有機分を多く含んでいるようであり、旧制広島高等学校造成以前の水田土かもしれない。第3層は盛土で、旧制高等学校造成のための埋立（整地層）と思われる。

調査区西端部および西部で第3層上面を掘り込み面とする構築物を確認した。調査区西端部では北部で煉瓦積施設を検出した（第63図A、写真27）。方形に組まれた構築物の南東隅と思われる、東西約30cm、南北約10cm、高さ約1m分を確認した。性格不明である。調査区西部（基礎柱F5とF6の間）ではコンクリートによる構築物を確認した（写真28）。平面コの字状に調査区内に張り出しており、西側は直線的

に調査区外（北側）へ続いている。東側は調査区北端部付近で直角に東側に折れて東へ1mばかり続いており、その先は再び北側に屈曲しているものと思われるが、調査区外のため確認できなかった。調査区内に飛び出したコの字状部分はコンクリートの厚さ約5cmで、内部は空洞状の構造である。上面が開いていたのかどうかは削平されているため不明である。東西約90cm、南北約1m、高さ（深さ）約90cmの規模で、床面はわずかに北側に向かって上方に傾斜している。内面は漆喰状の質感を呈する。また、北側にも壁を確認しており、調査区に張り出したコの字状の張り出しは小規模



写真 27 煉瓦積遺構検出状況



写真 28 コンクリート構築物検出状況

地下室状の閉じた空間であったと理解される。この構築物の基礎は煉瓦、拳大の礫などを敷いてコンクリートで固めており、20cm程度の厚さをもつ。コンクリート構築物は建物の地下遺構と思われ、北側に広がっているが、大半が調査区外に位置しているものと思われ、規模は不明である。



写真 29 褐色硬化面と土層堆積状況

調査区へ張り出したコの字状のコンクリート構築物の東側では構築物

に接して厚さ5cm程度の褐色硬化層が広がっており、硬化層地面には厚さ2～5cmの黒色～灰黒色粘質土が堆積していた（第63図C、写真29）。硬化面は基礎柱F4付近までは確認できるが、それより東側では確認していない。コンクリート構築物に伴う床面など遺構と推定される。

調査区西端部で検出した煉瓦積遺構および調査区西部で検出したコンクリートによる構築物とこれに接する褐色硬化面は第1層・第2層に覆われており、現在の附属学校建設以前の建物遺構と思われる。前者については規模・性格とも不明である。後者についても規模は不明であるが、建物の一部と推定される。調査区内に張り出した箇所は構造や内部の状況から便所の可能性がある。コンクリート構築物に接した硬化面は建物周囲あるいは内部の張床と思われる。これらの遺構は旧制広島高等学校に関連した遺構の可能性がある。

宮島地区（廿日市市）

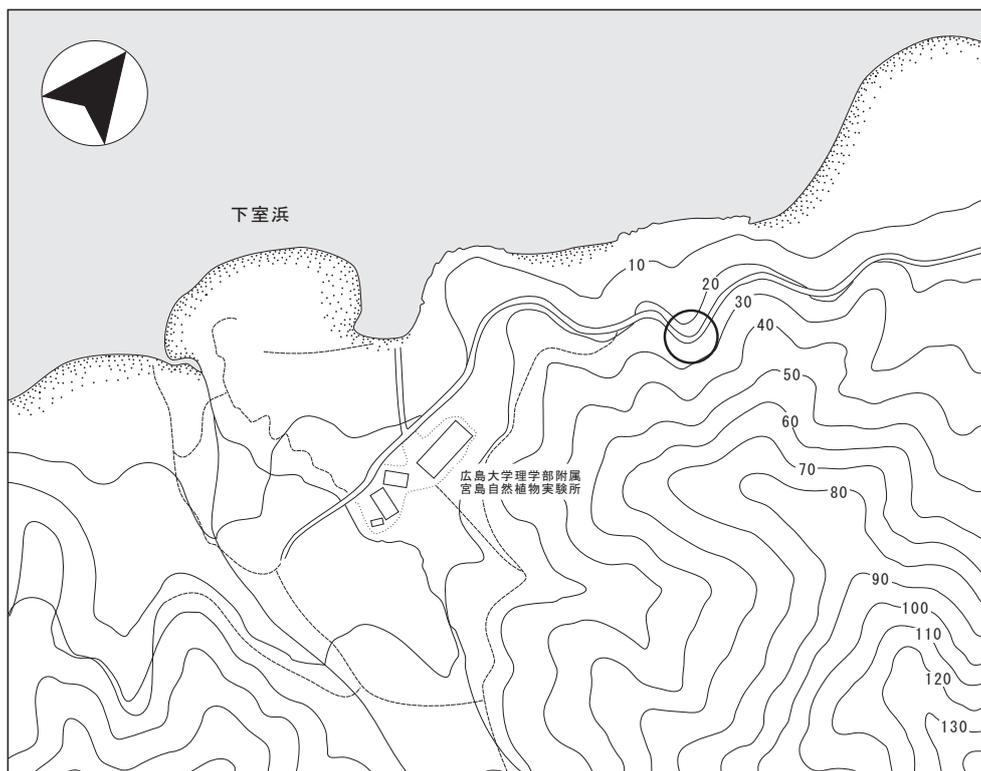
1) 宮島自然植物実験所門扉改修工事

所在地 廿日市市宮島町三ツ丸子山 1156-2 ほか

調査期間 2008年1月30日

調査面積 約0.8㎡

調査概要 宮島自然植物実験所入口の門扉改修工事に伴って立会調査を行った。まず、既存の2基の門扉支柱撤去ため基礎部分を60cm四方に上部のアスファルト、漆喰を除去した。その後、チェーンブロックで支柱ごと基礎を吊り上げ、撤去した。基礎撤去の掘り方をそのまま新しい基礎設置のために利用して新設基礎の掘り方として



第 64 図 宮島自然植物実験所門扉改修工事位置図 (1 : 5000)

(○印が改修工事位置である。)

成形し、深さ 80cm 程度まで掘り足した。新たな掘り方掘削面を清掃し、観察を行った後、写真撮影した。南北掘り方で堆積状態が多少異なっていたが、アスファルト及びアスファルト基礎の下層は砂礫混じりの褐色系粘質土層が数枚認められた。さらに、門扉基礎中央部分にフランス落とし設置のため平面 40cm 角にアスファルトを撤去し、深さ 20cm まで掘削した。堆積状態は門扉基礎掘り方上部と同様であった。いずれの掘り方からも、遺構、遺物は検出されなかった。

掘り方の堆積土は基本的に埋積・整地土で、敷地内に所在する明治期の砲台へ通じる道路造成土(実験所成立後、拡張している可能性もある)と思われる。南掘り方・フランス落とし掘り方の堆積土も砲台へ通じる道路の造成土で、基底部は花崗岩地山を水平に削平している。道路の南側には石組みの側溝が残されており、明治期のものと思われる。側溝上面は現道路面とほぼ同じであり、アスファルト下面とほぼ一致する。

沖美地区 (江田島市)

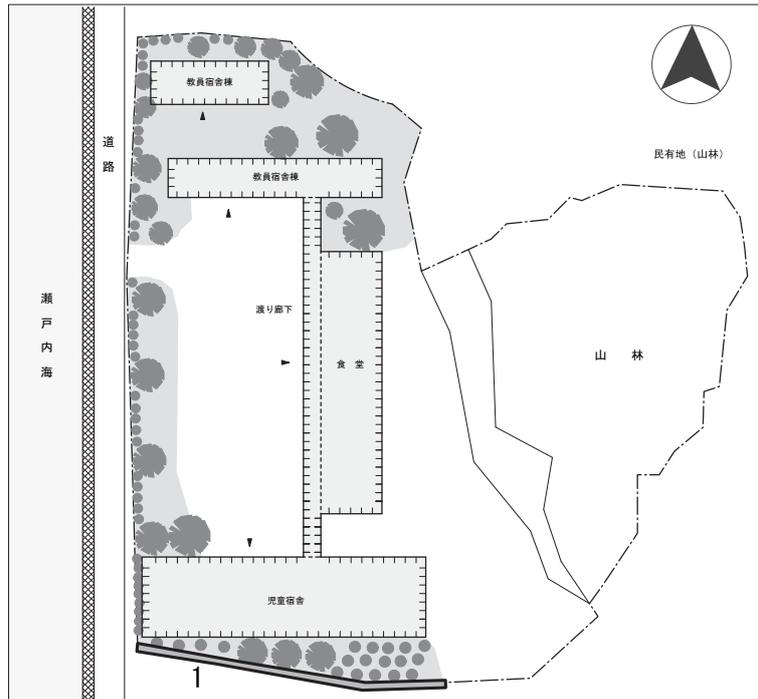
1) 附属小学校臨海教育場囲障取設工事

所在地 江田島市沖美町岡天王

調査期間 2007年7月9日

調査面積 約4.5㎡

調査概要 附属小学校臨海教育場の敷地境のPCフェンス新設工事に伴って立会調査を行った。PCフェンスは鉄柱22本で支え、鉄柱基礎設置位置に掘り方を掘削した。掘り方は、一辺25cm、深さ40cmの規模である。北側約15mは敷地を造成する際に旧地形を削平しており、表土層（灰褐色粘質土、厚さ



第65図 附属学校臨海教育場囲障取設工事位置図（1：1000）
（1の濃い灰色部分が取設工事位置である。）

25～30cm）の下は花崗岩地山であった。他の部分は、表土層の下は灰褐色粘質土、黄褐色粘質土、暗灰褐色砂質土など場所によって異なっていたが、遺構、遺物とも発見されなかった。

3. 調査の成果

最後に、2007年度（平成19）の試掘・立会調査についてまとめておきたい。

東広島地区では、立会調査5件を行ったが、遺構、遺物とも発見されなかった。池ノ上学生宿舎および連絡通路外灯設置工事2区では旧地形が良好に残されている部分については比較的平坦な地形であり、遺構、遺物の検出が期待されたが、その可能性が予想されるに留まった。また、同地区南半の藤棚付近ではかなりの盛土が行われていることが判明した。

霞地区では、立会調査7件を行った。本地区は旧陸軍広島兵器支廠（以下、兵器支廠と略す）跡地であるが、関連施設は全て撤去されており、施設配置状況などについてはほとんど記録がなく、どの程度関連遺構が残されているのかまったく不明な状態であった。昨年度から立会調査を始め、兵器支廠に関連する可能性のある遺構を数ヶ所で確認していたが、本年度は、原爆放射線医科学研究所研究棟新営工事、薬学系研

究棟周辺配管工事、大学病院環境整備工事、大学病院外灯設置工事に伴う立会調査で関連遺構、遺物を検出した。原爆放射線医科学研究所（以下、原医研と略す）研究棟新営工事では、ガス配管敷設地区、排水管敷設地区で、コンクリート面（層）、鉄製レールが検出された。時期を示す遺物等は出土しなかったが、コンクリート面（層）の構造から見て兵器支廠関連遺構の可能性が高い。現状では性格を明らかにすることはできないが、道路などの可能性が想定される。同遺構は今回の調査で新設された原医研の南側一帯に広く広がっていることが確認された。また、電気配管工事地区では兵器支廠建設の際の造成土（盛土）を調査区のほぼ全域で確認することができ、既存建物で掘削された部分を除き、新設の原医研周辺には兵器支廠関連の造成土が広く残されていることが判明した。さらに、電気配管敷設地区中央部では兵器支廠造成土下層の暗灰色～暗青灰色土層中で、杭列や磁器片が出土した。磁器片は小破片であることから詳細な時期は確定できないが、堆積層は兵器支廠建設以前の近世～近代の水田堆積層と推定されることから、検出遺構は近代～近世に位置付けられる。これまで霞地区の近世以前の様子についてはわずかに絵図等で知ることができるに過ぎなかった。今回検出できた遺構、遺物はわずかであるが、今後調査が進展すれば、具体的な様相を明らかにすることができる可能性が示されたことは大きな成果といえよう。薬学系研究棟周辺配管工事では、薬学部講義棟北側のF地区でコンクリート面（層）が検出された。調査区がきわめて狭く、コンクリート面（層）の掘削もわずかであったことから構造や性格は明らかにできなかったが、薬学講義棟の北側と広仁会館の間の広範囲に広がっていると推定された。検出レベルから見て兵器支廠に関連する遺構と想定され、新設の原医研の南側で検出したコンクリート面と同様な性格かもしれない。また、薬学部講義棟南側のC地区で瓦の集積層を検出した。周辺で明確な遺構を確認することはできなかったが、集積層の下層に何らかの遺構が存在するのかもしれない。

大学病院環境整備工事では、第I期工事第III地区で石組遺構（溝）を確認した。切石状の大型割石を使用して幅約70cmの溝を構築している。溝の主軸は東西方向で、現在の霞地区南側境界と平行して構築されている。今回の工事が移植のための準備であるため、石組の上面付近までの調査に留まったことから、溝の深さや構造については明らかにできなかった。溝の上面・上部からは広島大学病院銘の磁器が多数出土した。これらの磁器は昭和40年代初期の開発に伴って廃棄されたものと思われ、その際に溝も埋め立てられ、その上部に約50cmの盛土が行われたと推定される。また、出土遺物の中に第2次世界大戦末期に使用された陶製缶詰が確認され、本遺構が

1945年（昭和20）以前に遡る可能性があり、広島大学医学部設立当初の建物配置図では南側の境界に沿って平行した溝状の構築物が記入されており、これが溝であるとするならば、内側の溝に相当する可能性が高く、兵器支廠の南側境を構成する内側の溝と想定することができる。第Ⅱ期工事第Ⅴ地区では兵器支廠造成土（盛土）と推定される土層を確認した。

大学病院外灯設置工事では、歯科外来診療棟南の新設No.5外灯基礎でコンクリート基礎遺構、医学部基礎第2研究棟南側の電気配線ハブ（桝）設置地点で煉瓦敷遺構を検出した。これらはいずれも地表下60～70cm付近で遺構上面が検出され、霞地区で昭和40年代以降に大規模な開発が行われ、現在の景観が形成される以前に存在した構築物と考えられる。兵器支廠に関連した構築物である可能性が高い。新設No.7外灯基礎の東側隣接地において検出した角礫集積部分についても同様に理解できるかもしれない。また、新設No.1・No.2・No.5・No.6・No.17外灯基礎では兵器支廠造成の際の造成基礎土層（盛土）と推定される淡黄褐色・黄褐色砂質土～粘質土、角礫層などが検出された。それらの堆積層の上面は地表下約60cm付近に認められた。新設No.8・No.12・No.15・No.18外灯基礎についても同様の堆積層が存在したものと推定され、そのほかの工事に伴う調査成果を合わせて考えると、兵器支廠の造成基礎層は霞地区の広い範囲に残存しているものと想定される。

霞地区における今回の調査で検出された遺構の性格や時期、規模などについては、必ずしも十分に明らかにすることはできなかったが、兵器支廠に関連する遺構が敷地の各所に遺存していることが想定できるようになったことは大きな成果であろう。

翠地区では、附属中高校2号館耐震補強工事に伴って立会調査1件を行い、煉瓦積遺構、コンクリート構築物、褐色硬化面を検出した。煉瓦遺構は規模・性格とも不明である。コンクリート構築物は規模は不明であるが、建物一部と推定され、調査区内に張り出した箇所は構造や内部の状況から便所の可能性がある。コンクリート構築物に接した硬化面は建物周囲あるいは内部の張床と思われる。これらの遺構は旧制広島高等学校に関連した遺構の可能性はある。

宮島地区及び沖美地区ではそれぞれ立会調査1件を行ったが、遺構、遺物とも発見されなかった。

註

(1) 2008年度に広島大学大学病院関係者に聞き取り調査を行ったところ、旧職員の島本千里氏から1967

年（昭和 42）まで磁器の食器を使用していたが、その後プラスチックの容器に変更したとの証言をえた。

(2) 調査地点の北側に位置する西病棟（本年度解体）は 1961 年（昭和 36）・1966 年（昭和 41）に、総合研究棟は 1968 年（昭和 43）に建築されており、両建物建築の際に周囲も合わせて嵩上げが行われた可能性が高く、出土した大学病院銘の磁器にプラスチックの食器が基本的に伴わないことからその蓋然性が高い。